《研究ノート》

世界を横切って人民戦線（三）

平田好成

『（フランス）共産党は、いまなおスターリン主義とヘソ（臍）の緒がつながっている』
ミッテラン社会党書記長（現フランス大統領）、一九七一年。

五

第五の論文は、クロード＝マンフロワ Claude Mainfroy（フランス＝マルクス主義研究所編集会議委員）『諸ファシズムに直面するマルクス主義』である。論文は、五〇年振りで、回想されている。

この研究は、疑問から出発した。すなわち、反ヒトラー主義闘争におけるドイツ共産党の『誤り』―ディミトロフ Dimitroff に後押しされて、一九三五年でコミンテルン第七回大会に対して、一部分は分析された誤り―は、ある意味で、生まれつきのある欠如において、マルクス及びエンゲルス彼ら自身によって、委ねられた概念的な諸道具の誤りの源泉を持っているか。それとも、誤りは、これらの起源の概念的な資料と関係はなく、ドイツ共産党に、すなわち、第三インタナショナルに固有なある考え方に由来するか。

われわれの論題及びこれらの問題の公式化は、慎重さの代わりに、しかし、ある注目を要求する。

先ず、ブリュメール一八日のマルクスから……諸人民戦線まで進行する、続けられた開けた眺望を作ることはもちろん問題ではない。しかし、マルクス及びエンゲルスによって、ついでにドイツ共産党の政策の分析に直接策定された、概念的な『母胎』を取り巻くことは問題である。

別の所から、われわれが、マルクスによって、ボナパルト主義の分析を検討するであろう、われわれが、ファシズムが、ボナパルト主義に追い込まれることはできるであろう、テーゼ―タールハイマー A.Thalheimer によって主張されたテーゼ（A＝タールハイマー、『ファシズムについて』、流れに逆らって、ドイツ共産党＝反対派の機関紙、一九三〇年、すなわち、再版、すなわち、W＝アベンドロット W.Abendroth の指導の下に、『ファシズムと資本主義』、フランクフォルト＝シュル＝ル＝マン、一九七二年。）（そして、ある伝説に反対して、ヒトラーを先行した三つの『大統領の政府』に対してこの概念を適用した、トロツキーが、一線を画した、テーマの）―にくっついたであろう、決して事実からして当然、生じない。

同じ注目は、必要な変更を加えて、ブーランジェ主義 le boulangisme に有効である。すなわち、われわれは、ブーランジェ主義が、すでにあらゆる諸ファシズムの特徴、しかし、確かに、エンゲルスの分析の……及び『ブーランジェ＝ブランキ主義者たち』（彼らの間に、ヴァイヤンを数える必要がない）の同時にポール＝ラファルグ（エミール＝ボティジェリィ Emile Bottegelli の指導の下に、社会出版、一九五六―一九五九年、フリードリッヒ＝エンゲルス、ポール及びローラ＝ラファルグ、通信、一、二及び三巻、参照。そして、同様に、クロード＝マンフロワの指導の下に、社会出版、本質的な叢書、一九八三年、マルクス、エンゲルス及び第三共和制、一八七一―一八九五年。）のある誤りの研究を明白にする、ある特徴を保持するであろう、考えに気持ちが傾かない。

つまり、われわれは、しばしば『ファシズム』の概念を使用する。人々は、この概念が、事態を資本主義の危機につなぐことを切望していないで、むしろこれらの制度の間に存在することはできる、相違を主張する方を好む、ある数の著者たちによって、異議を申し立てられることを、知っている。すなわち、反ユダヤ主義の遍在性もしくは準不在、『同業組

合主義の』組織とテーマの重要性、等。

われわれの眼で、正しいかどうかは別として、『ファシズム』の概念は、―特殊性を待ち構える条件で、すべての資本主義が、ファシズムに通じていることを考えないように明白になり、豊かになる。（そして、ヒトラーのファシズムが、配置の政治的な形態であった、しかし、―R＝P＝ダットによって、一九三四年で確認された等価に反対して、他の諸形態の下に居を定める及び管理されることはできる、もはや国家独占資本主義が、ファシズムに通じている。）つまり条件付きで、そして、われわれは、労働運動の欠如と誤り―一九二三年で、クララ＝ツェトキン（Cl＝ツェトキン、『ファシズムに逆らって闘争』、すなわち、再刊、すなわち、E＝ノルテ、コロニュ、二刊、一九七〇年、の指導の下に、ファシズムについて巫術者たち。）が、それを把握したように―は、客観的にファシズムの飛躍あるいは維持に貢献することはできるということを、よく検討するように言うであろう……。

明白な論理の要求に反対して、われわれは、ブーランジェ主義の前にエンゲルスの態度の前、先ずボナパルト主義の前にカール＝マルクスの態度を分析するよう求めたであろう、年表のレヴェルを尊重しないであろう。それは、カール＝マルクスが、対決する、主要な問題は、ボナパルト主義者たちの国家と政策の相対的な自治の問題以外の他の問題ではないということである。さて、ブーランジェ主義が、勝利しなかったけれども、エンゲルスは、折れる及び分裂する前、一八八六年から一八八九年まで大ざっぱに言って―飛躍を知っているだろう、動きに対決された、ブーランジェ主義である。もしも、この動きの自治の程度と諸形態の問題が、その誕生の時あるいはその発展の間に（例えば、君主主義者たちの陰謀とツァーリストたちの策謀に対して）、よく提起されるならば、それは、そこで、エンゲルスにとって、主要な問題ではないであろう。

エンゲルスは、それによって、社会学的な基礎、すなわち、それを特徴づける、イデオロギー的な寄せ集めを取り巻くようにむしろ愛着を覚えるであろう。すなわち、共和制の諸制度に対して及び労働者階級の動きの自由に対して、それら

の可能な結果。すなわち、その危険は、彼の中で、素描の枠内で、マルクスが、すでに、一八七〇年の彼の第二番目の住所で危険を告発した、フランス＝ツァーリスト同盟で、―全く同時に、盲目的愛国主義でドイツ労働運動を閉じ込める及び戦争に対する逃亡によって、管理中のロシア革命を挫折させることはできた、フランス＝ツァーリスト同盟で持って行く、戦争の危険。

要するに、エンゲルスは、たとえ、それは、不平等な成功であったとしても、急進党員たちの言うなりになったブルジョワ共和制の防衛の名において、彼らの固有な目的と要求を隠したい気になるにせよ、ブーランジェ主義のイデオロギーの及び一部分は『民衆の』基礎のある『反資本主義的な』諸側面の理由で、疑わしい諸同盟によって気になるにせよ、ブーランジェ主義が、事実労働運動に目指した、多様な罠を追い詰めるように同様に愛着を覚えた。

確かに、これらの不安の幾つかの不安は、カール＝マルクスによって取り組まれたテーマを併合する。すなわち、例えば、少し、『アジア的な専制主義』のやり方で、フランス大革命の功績で光り輝かせたあるナポレオン三世のような、分割地農民を連結する愛着の型。すなわち、ブルジョワ共和派たちによって裏切られたプロレタリアートは、命の恩人の腕の中にいわば身を投ずる、事実。すなわち、盲目的愛国主義によって、一七九二―一七九四年のその進歩主義的な適当な時期に、愛国主義の上手な反動的な再利用……。

しかし、そしてたとえエンゲルスが時折そこで参照するならば、ボナパルト主義国家の相対的な自治について、カール＝マルクスの分析、すなわち、非常に特殊な及び複雑な分析が、われわれが、上昇、次いでヒトラーのファシズムの確立を取り組むであろう前、正しいもっと時機を得ていることで、明らかにしたであろうように、われわれに思われた。

エンゲルスが、強調するであろう、あまり有名でない逆説の一つ、それは、ブーランジェ G.Boulanger が、何よりも先ず、彼の昇進を、急進党員たちに対して……義務がある、事実である。初めは、彼の強い共和派の愛着を言い触らして（特に、オルレアン家に直面して彼の高慢な態度によって）、ブーランジェは、彼の民族主義の理由で、急進党員たちによっ

て、よく検討される。すなわち、当時の政治的な星座において、急進党員たちが、フランスを『ヴォージュ県の青い路線』を反らせることを願った、あるビスマルクと同意して、ガンベッターフェリィ Gambetta-Ferry の『日和見主義者たち』によって、一八八〇年の周りに勧められた—、相対的に、植民地に直面して控え目であるということを、実際、忘れる必要がないであろう。もしもこの逆説は重要であるならば、それは、その理由は、次いで、ブーランジェ主義の競争によって及び反議会の性格によって怖がらせた、急進党員たちが、反ブーランジェ主義闘争の前哨に対して自分を見出すであろうからである。士官学校生徒委員会のお陰で、すでに共和制で思い出された防衛の名において、労働運動の改良主義的な部分を従属しようと努めること。

『マルクス主義の』労働運動のための困難な状況、すなわち、ゲード及びラファルグのフランス労働者党ＰＯＦ。実際、その党は、必然的に、一八九三年の愛国主義のこの『新しい右翼』によって、ある抱き込みから逃れ去らない。フランスの中心部パリ及び諸革命の中心部フランス……。それは、国際的連帯の中で生温さに対して、しかし、最も古典的な盲目的愛国主義に対してさえ、理論的な後退で引っ張って行くことはできる……。われわれは、すでに、何の理由のため、エンゲルスが、国際的政策に関して、非常に危険なものとブーランジェ主義に思われた、このブーランジェ主義の側面を戦ったかを、理解した。

しかし、ブーランジェ主義の他の側面が、フランス労働者党を誘惑することはできることは、確信している。あるフランス労働者党は、労働運動において、それらの敵対者たちあるいは競争者たちの態度に反応して、それらの態度によって定義するように、不愉快な傾向を持っている。さて、可能派たち possibilistes たちは、あらゆる残りを忘れながら、共和制があるままに、共和制を防衛する……。そして、人々は、そこで、市当局の問題に対する程の少し問題提起に対して目撃するであろう。すなわち、ブルース Brousse 及びマロン Malon の党が、一八八二年以降、万能薬として、市当局の、市当局の『公共事業』の征服を褒めそやすように、フランス労働者党は、—モーリス＝モワソニィエ（モーリス＝トレーズ

研究所歴史雑誌、一九号、第四・四半期、一九七六年、における、モーリス＝モワソニィエ、『ゲード主義者たちと市の戦い（一八九一―一九〇〇年）。原理の動揺について考察』、参照。）は、著しく、征服を証明した。―セクト主義の、独断的な拒否の状態に閉じ込もる。さて、一八九〇年代の初めに、労働運動の発展は、その党を、無視し得ない市当局を勝ち取るように認める。そして、市の権力、諸闘争及び権力の征服の間の組み合わせについて、何の理論的な考察を処理しない、フランス労働者党は、その件について、最も平らな日和見主義に対して通り過ぎるであろう……。共和制の問題について、ラファルグは、正確に、ブーランジェ主義において、積極的であることはできるであろう、すべての問題を探したい気になるであろう。

エンゲルスは、ブーランジェ主義の反資本主義のテーマが、混乱している及び人を誤らせる、そして、『民衆の基礎』が、これらのテーマについて、正確に、フランス労働者党によって同時に募集させることはできないであろうことは、ブーランジェ主義に対して、理解させるのに苦労するであろう。

混乱した及び人を誤らせるテーマ。『創造的な資本』と『収奪的な資本』の間、従来のナチの区別を実は知らせることはある、テーマ。この最後の収奪的な資本は、ユダヤ人たちにとって同一化したのに。ヒルファーディング、次いでレーニンが、『金融資本』と名づけるであろう、問題の統一を検討する代わりに、古い中産諸階層は、明白な敵対者として、大きな商業及び大きな銀行を持っている、―そして、ナチのイデオロギーは、これらの部門の中で、歴史的でない、しかし『自然主義の』説明を、ユダヤ人たちの比例的という以上の影響力で、与えるであろう。古い中産諸階層が、プロレタリアートの中に倒れるように恐れる、そして『積極的な』資本主義を、消極的な資本主義、他の資本主義に対立させることにもはや用意のできなかっただけに一層多く、古い中産諸階層を誘惑することはできる、これらのテーマは、後に、ナチズムの権力の座への到着の時、階級闘争から反らせるよう……、そして、少し後で、ユダヤ資本をアーリア族化するように認めるよう、二重の優位を立っていた。二五カ条で、一九二〇年の綱領の約束は、長続きすることなしに、とりわけ、大きな百貨店の『市所有化』……。

比較は、ブーランジェ主義と一緒に、位置を変えられるどころではないであろう。時折、一八七〇年代の最初の半分の危機の、すなわち、一八八二―一八八六年の危機の新教のあるいはユダヤ教の銀行よりもっと辛抱した、カトリック教の銀行は、いわゆるユダヤの寄生虫による障害の前に、怒りのこの上昇で利用しようと実は煽り立てるあるいは努めることである。

それは、エンゲルスは、評価する、―彼女の夫を説得させるため、ローラ＝ラファルグ（マルクスの娘）の慎重な援助に頼るであろう―この基礎についてではない、実は、人々は、彼の民衆的な基礎をブーランジェ主義にとって引き抜く、あるいはブーランジェ主義と一緒に幾らかの同盟を試して見ようと努めねばならない。

そして、エンゲルスは、一方で、ポール＝ラファルグを発展させるため、他方で、外国の諸労働運動の近くに、フランス労働者党が、ブーランジェ＝ブランキ主義者たちと違って、ブーランジェ主義に対して愛想の好さでいかなる点においても罪に価えしない、テーゼを主張するため、危険な軽業に熱中する義務があるであろう……。

討論は、国際的労働運動それ自体において、実は賭けられているものであった。実際一八八九年で、パリで、新しいインタナショナル第一回大会が開催されるであろうことは、想起する必要がある。そして、可能派たち（ある共和派の幻想で浸透させた、そして『あらゆる犠牲を払って』統一に希望する、長い間、あるリープクネヒトそれ自身の部分的な支持を持っていたという）は、フランス労働者党の曖昧さを指さすように機会を逃さない。

つまり、『ブーランジェなしで、フェリィなしで』、正しいスローガンの下に、フランス労働者党は、エンゲルスの勧告のお陰で、従って戦いに身を投じた。恐らく、留保の間に結ばれた、二つの留保と一緒に。

最初の留保は、この決定的な時に、組織の諸問題が、フランス労働者党を、党の固有な日々の機関を持っているのを妨げたことである。それは、党のスローガンの正しさにもかかわらず、党の影響力を弱めた。

他の留保は、フランス労働者党のスローガンが、単に消極的になる、事実から当然来る。スローガンは、何の展望を描

かない。

確かに、半ば冗談によって、半ば—慎重に、もしも共和制は、あまりに危険でいるので、急進党員たちと日和見主義者たちが、共和制を確認するならば、彼らは、単に共和制の防衛の最良の防衛、すなわち、労働者人民の武装……に対して頼らねばならないことは、エンゲルスに対して、言うことが起こる。実際には、純粋な宣伝、そして同時に両刀論法的な宣伝。その理由は、宣伝は、だからと言って、プロレタリアートに対して、武装するように具体的諸手段を与えないで、穏健な共和派たちを怖がらせることはできる……。フランス労働者党の信頼性のある不足は、その代わりに、党の出版によって、労働者の注意を一手に集めるのを党の困難を説明した、恐らくそこから来た。

これらの欠如に対して、エンゲルスは、当然、外部ではない。その理由は、恐らく、ブーランジェ主義が、ぼんやりと動向を取り戻しながら、答えた、そして、エンゲルスが、感じなかった、ある動向、すなわち、当時の望み（ラリィ＝ポルティス Larry Portis、ジョルジュ＝ソレル、紹介と選ばれた原文、マスペロ、一九八二年、参照。そして同様に、すなわち、ゼェーフ＝シュテルネル Zeev Sternhell、革命的な右翼—ファシズムのフランスの起源、一八八五—一九一四年、スイユ、一九七八年。これらの二つの著作は、諸情報でもたらす、そして、たとえ著作の分析が、われわれに時折混乱した及び曖昧なように思われるならば、しばしば貴重な新しい諸問題を提起する。）がある。そして、確かに、情報提供者として、ラファルグは、彼の固有な怠慢あるいは誤りの幾つかのものによって、時折責任がある。古い無政府主義者を戦った、ラファルグは、ある望み、すなわち、一八九〇年代の無政府主義が、それらの周りに向けた、行動及び組織の諸形態、次いで、革命的なサンディカリスムの母胎、アナルコ＝サンディカリスムの種を殺さなかったか。

すでに、一八八二年頃、周期的な危機の出現で、ルイズ＝ミッシェル Louise Michel は、フランス労働者党の『マルクス主義者たち』よりもっと、失業者たちの運動及びデモ行進を組織する資格を証明した。

同じように、エンゲルスが、労働運動に対して、ある出口を閉められたままにして、そして新しい右翼—反ユダヤの、

国民投票の、民族主義者の―に対して、直接の民主主義の及び自主管理の分野であった、分野を放棄して、当時のフランスの社会のある深い諸傾向を欠けていたというように、われわれに、思われる……。

直接の民主主義の少し反復的なある『註釈』は、いささか、エンゲルスを罠にはめなかったか。確かに、その民主主義は、有利な仕事が、奴隷たちに留保されたのに、アテネで、市民たちの特権であった。そして、しかし……。

ブーランジェ主義を先行したあるいはそれに続いた（パナマ）、あらゆるスキャンダルの結果、当然、議会主義を除名しないで、しかし、議会主義を押し付けあるいは議会主義を抑制して、時折、パリ＝コミューン後、マルクスが、彼のやり方で統合し始めることはできた、下部組織の意思の上部組織でのこの再編成の中に―議会主義の代わりになって、もっと直接の民主主義に対して望みがなかったか。制度的に、それは、すなわち、同時に、上院の影響力を減らすことを願う、しかしとくに、ますます、直接の民主主義に対してその地位を作ることを願う、当時の意味で、『修正主義の』動向であった。請願の下で、人々は、確かにバレース Maurice Barrès の名（ジェーフ＝シュテルネル、モーリス＝バレース及びフランスの民族主義、A＝コラン A.Colin 及び国民政治学協会、一九七二年、参照。）、しかし同様に、アルマーヌ派たち allemanistes（左翼の可能派たち）の、将来のアナルコ＝サンディカリストたちの、アルギィリアデース Argyriadès の名を発見する。一八八六年で、明らかに、伝動ベルトとして諸労働組合を考える、フランス労働者党によって理解されていない、企業から、ぼんやりと自主管理を望む、同じ請願がある。

人々は、これらの動向を『欠けてい』ながら、エンゲルスが、歴史的機会を失敗に終らせなかったかどうか、自問することはできる。当座のため及び将来のため。その理由は、後で、ナチズムは、人々が、それを言うことを望んでいなかったという以上に（一九三〇年以降、それらの企業細胞によって、次いで『労働戦線』によって、労働の場所の威厳と調整の要求で行われた回収によって）、自分の責任で、古典的な労働運動が、いささか過小評価した、望みを回復することを、よく知っているであろう。それは、だからと言って、エンゲルスのこれらの欠如が、三〇年あるいは四〇年後に、ドイツ

共産党の及び第三インタナショナルの欠如と誤りを説明することは、意味しない。他の特殊な諸要望は、演技した。そして、時折、マルクスの及びエンゲルスの貴重な教訓は、否認された。しかし、エンゲルスそれ自身のこれらの欠如を黙っていることは、それは、聖者伝のような振舞うことであるだろう。

ボナパルト主義国家の相対的な自治について、マルクスが発展させた、見解に取り掛かろう。その理由は、われわれは、ドイツ共産党が、ナチズムを内部から崩壊させるため、これらの矛盾を利用するよう、可能性あるいは困難さで、ナチズムから権力の座へ献身した、接近で、これらの見解を直面させねばならない。（ピエール＝エイソベリィ Pierre Ayçoberry、ナチ問題—国民社会主義の解釈、一九二二—一九七五年、スイユ、一九七九年、参照。そして同様に、すなわち、ニコス＝プーランツアス、ファシズムと独裁。ファシズムと直面する第三インタナショナル、マスペロ、一九七〇年。）(一)

ボナパルト主義国家の……そして、一般的に言って、国家の及び政策の自治

われわれの目標は、少しも、主題について、マルクスの諸態度の機会で網羅的な報告を作ることではない、しかし、提起された諸問題、採択された諸態度、ためらい及び起こり得る諸矛盾を境界を定めることである。

中心問題は、われわれが、次に分析するであろう、ファシズムと関係があり、二重である。すなわち、ファシズムにおいて、独占企業の意識的な操作の排除した結果を検討する、『代理人たちの理論』は、正しいか。いったん権力の座に到達した、ファシズムは、これらの独占企業に対して、ある自治で享受するか。

それは、ブリュメール一八日においてである……、実は、マルクスは、とりわけこの現象に興味を抱いた—エンゲルスは、住宅問題において、それに戻ったであろう。

実際には、国家の相対的な自治について、考察は、マルクスにあっては、もっと古い及びなお深い。上昇するブルジョ

ワジーを統合するのを探しながら、あるいは、そして、経済＝社会的な諸形態の及び諸制度の発展によって、資本主義的諸機能に対して、貴族の穏やかな移り変わりを保証するのを探しながら、だからと言って、君主制が、貴族の方へ軽くもっと傾けることを変わりはない、均衡の権力を保証するため……、都市のブルジョワジーと封建的貴族の間に遊びの恋をする、君主制のために。

考察は、一八八〇―一八八一年のそれらの年表的ノートに対するクロイツナッハ *Kreuznach* 及びパリの雑誌で、マルクスを心配させた……。

ボナパルト主義のために、マルクスは、ブルジョワ共和派たちに直面して、分割地農民の傍らに、最初のナポレオンの革命的な威光で飾られた、労働者階級の失望の理由で、ボナパルト主義が、政権の座に来たということを、注目する。しかし、どの政策は、『ドゥミ＝モンド』（金持ちの囲い者等を中心にする社交界）の出のこの暴険家たちの一味を引っ張るであろうか。

返事が、不安定であるということを、確認しなければならない。ある時は、マルクスは、ボナパルト主義政府が、ブルジョワジーとプロレタリアートの間に均衡の政策を実践する、テーゼに対して傾くように思われる。ある時は、マルクスは、ナポレオン三世の政府が、この均衡を実現するよう印象を与える、違ったテーゼに対して傾くように思われる。そして、一八六〇年代の最初の半分において、国際的展覧会の傍らに、労働者代表たちに対してこの勇気、労働者階級の運動の及び組織の最小限に対してこの寛容は、存在した……。まるでユナニミスム（一体主義、集団を持つ超個人的な性格を主題とするもの）の彼の幻想即彼の扇動において、ナポレオン三世は、エミール＝オリヴィエ Emile Ollivier を呼ぶ前に及び一八六〇年代の終わりのストを鎮圧したであろう、自由主義的なブルジョワジーと一緒に牧歌を探す前に、労働者階級の方へ傾いたかのように。

すべてそれは、遠くに行くことはできなかった。すなわち、その理由は、たとえそれは、保守的諸階級、政治的代表の

その諸階級の形態、資本主義を救うためその諸階級の政治的代表者たちの役割を『犯す』義務があったとしても、ナポレオン三世は、資本あるいはその代表者たちと協力した。すなわち、生活は、河である。そして、経済的及び社会的構成体は、二つの対立した方向の決定の間に静態的に停止されることはできない。

その代わりに、現実である問題、それは、対外政策のある自治であり、そして、支配階級が、率直に考えなかったであろう、経済的発展の形態である。

同様に、ある意味で、現実である問題、それは、時折、労働者階級で行った相対的な一時的提携は、その階級を過大評価しないという及びプルードンが、応じた、イデオロギー的な統合に譲歩しないという条件で、労働者階級に対して、行動のある幅を与えることはできたということである。

第三帝国に対して事態を報告するため、慎重に、可能なある類推を想い起こそう。

来て自由主義的なデフレーションの政策の代わりになる、国家独占資本主義の配置は、なぜならそれは、イデオロギー的な反射的動作に衝突した、あるいは、そしてなぜなら反射的動作は、国家（軍需生産、自給自足経済）によって勇気づけられた産業部門が、反射的動作ではないということを、正しいかどうかは別として、恐れた、ある大資本家たちの経済的不安を引き起こさせることはできた。

同様に、大資本と軍隊に関して、対外政策について、相違はあったかも知れなかった。ラインランドの再軍備の時、当時の圧倒的なフランスの優位性を意識している、大参謀部の部分は、ヒトラーが、政治的諸理由のため、―スペイン戦争の間、ミュンヘンで及び『奇妙な戦争』の間、繰り返された、西欧民主主義諸国の臆病、すなわち、貴重な階級的諸理由を持っていた臆病を儲けた、危険をさらしたこの賭けに対して控え目であったということを、人々は知っている。すなわち、ナチズムに対して果断な軍事的な対立は、あるラヴァールそれ自身が、口先だけで結論した、ソ連邦とこの同盟について、国の外で首尾一貫した反ファシズムの政策について、国の内で支えられる義務があった……。『人民戦線よりはむ

しろヒトラーを』、製鋼業協会のこのスローガンは、ある意味で、ヒトラーの危険を犯した賭けに対して、それらの成功を保証した。

ヒトラーのある自治は、現われた、他の討論がある。すなわち、それは、人々が、『中央の諸帝国』を一四―一八で呼んだであろう、問題を孤立させ、長い戦争の場合には供給を保証するため、ある技術員たちによって褒めそやした、『電撃戦』あるいは『奥の方向に装備』という二者択一の討論である。そこで、経済的な戦い及び戦略のそして記号論理学の現論的な討論があった。すなわち、ドイツ民主共和国の大歴史家、アイヒホルツ D.Eichholtz（D＝アイヒホルツ、ドイツの戦時経済の歴史、一九三九―一九四五年、一巻、ベルリン東部、一九七一年、参照。すなわち、部分的仏訳。ヒトラーのファシズム。現在の研究。マルクス主義の光で国際的研究、六九―七〇、一九七一―一九七二年、における、『ドイツの戦時経済の歴史、一九三三―一九四五年。』）は、起こる経済的敵対関係を十分に証明した。（各々の圧力集団は、その経済的利害を考慮して、そのような内閣当局を使用するように、あるいは、そして、その見解に対して有利な、その情報から引き起こすように試みた。）それでも、スタリーングラードの大転換点まで、その上成功で取り囲まれた、電撃戦の戦略の勝利を保証するため、歴史の中で、ヒトラーのある自治が、否定できなかったことに変わりはない。

ゲーリング業績 Goering-Werke の『性格』は、同様に同じ問題の型を提起する。すなわち、政治的暴険家の極めて大規模な企てか、あるいは、そして、ファシズムによって配置された国家独占資本主義の典型的な企てか。

要するに、ドイツ共産党は、第二帝政の時、労働運動の諸問題と、実は、時折関係はあった、諸問題に直面させた。すなわち、ドイツ共産党は、同時に、ナチ突撃隊員たちの起源の階級の全体的な恵まれぬ人々の生活水準の引き上げ策 promotion sociale、そして、あるいは行政と軍隊において、多数の彼らの間の個人的な生活水準の引き上げ策 promotion individuelle を保証したであろう、第二の革命の欠如で不満な、内部から、ナチ突撃隊員たちＳＡを浸透しなければならなかったか。ナチ突撃隊員たちを、ナチ親衛隊員たちＳＳに対立させながら……。ドイツ共産党は、『労働戦線』の中に

入り、そして、―同時に、統合の……及び抑圧のあらゆる危険で、内部から、労働戦線を止めるように試して見なければならなかったか。

部分的に、フランス共産党は、他の状況に知った、諸問題がある。すなわち、フランス共産党は、同じ危険で、ヴィシーの同業組合主義の『労働組合の』諸組織の中に入るに違いなかったか。究極的に、後で、『ドイツの労働』ＴＡという名の組織が、同様に対決された、問題はある。その理由は、組織は、情報を作るのに限られなかった、しかし、移住労働団ＭＯＩから生れた（拙稿『フランス人民戦線論史序説』法律文化社、一九七七年、二一九頁参照。）、占領のドイツ軍の傍らに、同様に宣伝と扇動を試みた。

事実は、マルクスは、本質的な問題を指さした。しかし、本質的な同様に複雑な問題。そして、恐らく、もしもマルクスが、もっと前に、問題を解決しなかったならば、それは、末決定のままに、なおもっと深い諸問題が原因である。マルクスは、クロイツナッハとパリの雑誌の時、国民公会の歴史を書くように計画した。マルクスが、国家と『政策』の相対的な自治を懸念するのを極端な困難の理由で、とりわけテーゼに放棄したように等しく、―たとえ討論が、数年以来、両方で創造的に進展したとしても、われわれは、見解の諸点をよく分割しないであろう―、フランソワ＝フュレ François Furet によって、前進されたテーゼに対して、われわれは、喜んで傾いたであろう。（クロード＝マンフロワ、一六号博士の指導の下に、マルクスとエンゲルスから書かれたフランス大革命について、参照。そして、同様に、マルクス主義研究所歴史雑誌、二一号（一九八五年）における、クロード＝マンフロワ、『一八七〇年以降、マルクスとフランス大革命』、一九八五年四月のマルクス主義研究所のシンポジウムに対する報告。）かつて真に、次いで徹底的に回復された問題がある。

そして、かつてマルクスとエンゲルスが、どうにか両立しとげなかったということを、国家の起源について、考察に対して、二つのテーゼに対して参照させる、問題がある。すなわち、開発の権限内に『職務の権限』の地滑りで生まれたか、あるいは、すでに構成された諸階級の拮抗から由来するか、そして事実上の、起源から、一般的利害のスローガンの下に、

その階級的政策を包み隠すか。

この解決されなかった問題は、労働運動の『諸変化』に重くのしかかった。

それは、ドイツの共産党の及び第三インタナショナルのあらゆる誤りが、この独創的な曖昧さによって理解されることは、だからと言って、意味しない。しかし、誤りは、疑いもなく、部分的にそれによって理解される。すなわち、その上、マルクスに対して、そして時折、エンゲルスに対して恩義がある、他の貴重な経験で創造的に同化させるのに、特殊な困難と一緒に、誤りは、理解される。(二)

国民社会主義の上昇及び創設に直面するドイツ共産党

もしも人々が、歴史を党の誕生の諸条件から分離させるならば、人々は、ドイツ共産党の歴史を理解することはできないであろう。すなわち、一九一八年一一月の革命及びドイツの残りにおける一月から三月まで、ベルリンで一九一九年一月と三月における諸評議会の破壊。

ワイマール共和国は、『共和派たちのない共和国』であった（ハノーヴァー Hannover、政治的裁判、一九一八―一九三三年、フィシャー＝ブュヘライ Fischer Bücherei、知識の図書、七七〇、参照。）、そして、それは、共和国の最後の失敗を説明するのに貢献したであろう。叙述的な、決まり文句は、不正確ではない。しかし、もしも人々が、不幸な偶然の結果としてさえ、『共和派の教育』の欠如の唯一の徴候としてさえ、この特徴を考えるならば、決まり文句は、人を誤らせる及び改良主義的になることはできる。

実際には、この欠如の根源は、もっと深い。一九一七年一〇月のロシア革命によって開始された背景において、ドイツで共和派の形態は、単に民衆の望みの基本要素の一つである（よく明確に、ジルベール＝バディア Gilbert Badia の第一巻、現

代ドイツの歴史、社会出版、一九六二年、参照。著しく豊かになった新しい刊行及び雑誌は、準備中である。）—地区及び工場から、大生産手段の社会主義化から、真の農業改良から出発する、大衆の及び自主管理方式の民主主義と比べれば……。確かに、無視し得ない要素、そして、その上に、カール＝リープクネヒト及びローザ＝ルクセンブルグは、社会民主主義系労働組合に対して参加の問題について同様に、スパルタクス団—ドイツ共産党の創設大会に対して少数派であった。ソヴィエト＝ロシアで会議の解散において、一時的な決定という他の事柄を検討するように拒絶して、—打撃の後、『理論化する』こと、そしてなおさら、他の状勢に対して機械的に広げることは、問題はあり得なかったであろう—、彼らは、確かに、重心が、主導権、管理及び—衝突の場合に—大衆の決定の優位性である条件で、ドイツの歴史は、国政選挙に対する及び議会の仕事に対する参加を押し付けた即認めたことを評価した。彼らは、首尾一貫しなかった、そして、共産党員たちは、単に国政選挙に対して一九二〇年で立候補したであろう。

要は、しかし、そこにいない。すなわち、その理由は、もしも党が、労働者のミリタンたちと知識人たちで構成された革命的『エリート』を代表したならば、ドイツ共産党—ある評議会において党の決定的な影響力にもかかわらず—は、確実に、一九一九年の国政選挙に対して素晴らしい結果を拾い集めなかったであろう。そして、影響力は、労働者たちの大衆を、議会の形態から反らせることはできたように、党は、当時影響力を持っていなかった。

『悪循環』は、革命のプロレタリアの—社会主義の諸任務が、完全に実現されない、そして、それは、エーベルト対グレーナー Ebert/Groener の秘密協定の枠内に完全に実現される事実から、本質的に構成される。すなわち、われわれは、単に皇帝のみならず、皇帝の制度を自由にする、あなたの方では、あなたは、社会主義に対して大衆の活力を取り戻す、ブレーキを掛ける条件で、グレーナーは、認可する。従って、ブルジョワ共和国のレヴェルにおいて、遊撃隊によって『真の左翼』に反対して防衛するのを、位置づけられた妥協。その理由は、軍隊は、仮に、物質的に及び精神的に、余りに分離される。遊撃隊は、革命を圧し潰した後、遊撃隊を生ませたこの同じ共和国に反対して裏切る前に、バルト諸国で及び

ポーランドでドイツ帝国主義を防衛するであろう……。

そのように、ワイマール共和国が、国家の機構における君主主義的基本要素の維持の、そして、彼の死の前に少しリープクネヒトによって宣告された社会主義及びプロレタリア共和国でなかった、制度に関して労働者大衆の反愛情の二重の結果が原因で、ある意味で、『最初から失敗し』たということを、人々は、言うことはできる。冷酷な経済的な論理、資本主義的な意味において行使される連合国の圧力（例えば、革命的騒乱の危険な追跡の場合に、食糧の非配達に対するアメリカの強請）は、一覧表を完了した。すなわち、一九一八―一九一九年は、財産に対して及び生産と交換の大きな手段の方向に対して触れなかった、しかし、ただ、ある社会的な再分配、多くの社会的な安全保障、少しの労働者の参加を紹介した。すなわち、すべてそれは、ほとんど、ルール地方軍隊の労働者の大敗北の後、地図から、ザクセン及びチュリンゲンで上部で社共団結の最初の諸政府から、ハンブルグでテールマンの蜂起から―一九二三年で位置づけられたあらゆるこれらの事件―、抹消された。製鋼業協会とドイツ石炭経営者の間の秘密協定は、フランスの軍隊の圧力の下に、一九一八年で獲得された『八時間労働』でなくて、労働の一〇時間の基礎について、労働の再開を決定した。それは、『合理化』を付け加わる必要があることである……。

これらの条件において、ドイツ労働運動が、労働者階級のため、共和派の形態の優位を極く内輪に見積るようにしたい、すなわち、四八条の基礎について、そしてそこで『より小さな害悪』を見た、社会民主主義者たちの寛容の基礎について、政府命令によって統治する、一九三〇―一九三三年の三つの『大統領の政府』の時、ますますその内容で空にした、労働者の意識を目覚めさせ及びその意識を叛乱に向かわせ、率直な独裁が、このブルジョワ議会主義の阿片よりよかったということを、主張するまで進むようにしたいと気になっていたということを、人々は、理解する。

しかし、理解することは、当然承認することを意味するか。なお弱い共和国に反対して、マクーマオン対ブログリー Mac-Mahon/Broglie のクーデタの企ての時、再構成の途中に、フランスの労働運動は、この問題に対して対決して見ら

れた。企てのドイツの同志たち—ラッサールの勢力範囲から生じた、そして間もなく日和見主義の中で泳ぐであろう、あるハゼンクレーヴァー Hasenclever ……—は、本当に、パリ＝コミューンの時、労働者の血を免れさせなかった、これらのブルジョワ共和派たちを戦うままにして置くように企てを勧める。そして、確かに労働者階級の直接の及び将来の戦いを容易にしない、独裁の政治的諸形態と、—実際にブルジョワ議会主義の下に存在する—、快活に『資本の独裁』を混同すること……。

マルクスは、一八七七年七月一日の前進誌の中で発表された、ハゼンクレヴァーの論文に対して、素気なく及びはっきり答えるであろう。然り、国民的伝統が、その形態を許す時、共和派の形態は、政治的独裁よりもっと労働者階級に対して有利である。否、政治的独裁は、たとえ議会共和国が、抱き込みのある危険を含むならば、機械的に、労働者階級の明晰さと勝利の増大する機会を引き連り込まない……。

歴史は、悲劇的に、マルクスの観点を正しいと認めた。ナチズムの破産（万一の場合、労働運動の一寸した介入によって援助された、ナチズムの準自動的な崩壊）は、大資本を考慮して、客観的にナチズムの独創的な綱領とナチズムの政策の間の諸矛盾にもかかわらず、生じなかった。一九三四年六月／七月で、ある非妥協的な人たち（その人たちに対して、ノイマンは、便利な『身代わりの山羊』で使う）は、第三帝国の崩壊の切迫した前日のように、長いナイフの夜を紹介する。それは、構想中の、ディミトロフ路線の理解と適用をブレーキを掛ける。

それは、政権の座にいるナチズムが、少なくとも、多数の彼の敵対者たちが、予定しなかった、巧妙に結合された、三つの切り札を利用することはできたということである。すなわち、生産の、そして部分的に、自給自足経済の及び軍需生産の政策によって、仕事の現実の振興。すなわち、反ユダヤ主義で、内部の『セメント』を作った、同時に大量の及び鋭敏な宣伝。すなわち、ナチ権力の唯一の道具として引用された、テロルの脅威。そして、一九四三年初めまで、自己陶酔的な確認として、いわば自然なドイツの優位性のものであった、電撃戦の成功を付け加える必要があったであろう……。

確かに一九二〇年で、ためらいの幾つかの長い数分（あるいは数時間？）の後、大衆の運動は、ドイツ共産党を、カップ一揆に反対して（共和国でない労働者部隊、マルクス主義雑誌出版社、新／マン、一九七〇年、参照。）、共和国の防衛を考慮して、運動の先端に着手するように、そしてドイツ共産党を、新しい労働者の攻勢に変化するように試みるように、仕向けるであろう。その上全世界の驚きに対して、全体的に成功された最初の局面。すなわち、しかし、第二の局面は、政治的名誉を回復した、社会民主主義者たちと陰謀の荷担者たちの一部分の間の結合が原因で押し潰された……。

一九二三年は、バイエルンから、ドイツ＝ファシズムの上昇の最初の波であるだろう。一九二三年春に、クララ＝ツェトキンの驚くべき明晰な干渉にもかかわらず、―ツェトキンは、プロレタリアートを含めて、広範な大衆が、ファシズムによって誘惑される、ドイツ共産党によって提供された、十全な行動と諸展望の諸様式の欠如が、このファシズムの成功の一部分に関して、責任がある、知的労働者たちと新しい型の同盟が、ファシズムに対して、『文化』、広範な大衆を満足させる、ずっと高くなった生活の様式を対立させねばならないということを、強調する―、ドイツ共産党は、ファシズムの狭い及び不十分なヴィジョンの状態に閉じ込もるであろう。

一九二三年一一月で、ヒトラーが、彼のミュンヘン一揆を準備するのに（彼の共犯者、フォン＝カール Von Kahr は、むしろヴィテルスバッハの再建、そしてオーストリア及びヴァチカンの近くにバイエルンの自治を探し求める、そして最後の瞬間に一揆を裏切っただから、失敗するだろう）、ドイツ共産党は、フォン＝ゼークト Von Seeckt 対ドイツ社会民主党のカップルと一緒に、ベルリンの方へ、あるいはなおバイエルンの分離主義及び中央党の方へむしろファシズムを検討する……。新しい大衆の基礎及び反資本主義的上辺は、混乱したイデオロギーの上に建てられた、ファシスト現象の特殊性の全面的な認識不足。

そのように、一九三〇―三三年において、ドイツ共産党は、党と一緒に、大衆の基礎なしで強権的な諸政府を混同しながら、そして社会民主主義を『社会ファシスト』で取り扱うまで進行しながら、至る所でファシズムを検討するであろう。

そして、一度政権の座にある真のファシズムとしたら、ドイツ共産党は、ドイツの工業的高水準、ドイツの労働者階級の豊かな伝統が、急速にファシスト独裁を破壊するのに貢献するであろうということを、考えるであろう……。

……しかし、パリ＝コミューンの勃発に対して、一八七一年でクーゲルマンのように、『自宅で教訓の供給者』であることは、容易である。そして、ドイツ共産党の誤りは、実は部分的な根拠であった。それは、だからと言って、誤りを正当化しない。

大統領の政権が、客観的に、ほんの少しずつファシズムに準備した、そして二つのやり方で準備したということは、真実である。すなわち、一方では、大統領の政権は、運命になる、受動性に慣れた。すなわち、他方では、大統領の政権は、ナチ党に対して、こっそりこれらの大統領の政権の責任者たちを出合いながら、これらの緊急法令の強権的な形態に反対して、そしてそれらの法令のデフレーションの内容に反対して……、公に抗議するよう、ぜい沢を自分に与えるように認めた。

他方では、ドイツ社会民主党の『寛容』と『より小さな害悪』の政策が、同時に、ある類推及びファシズムの強化のある効果を許容することはできたということは、真実である。すなわち、しかし、そこから、ファシズムと社会民主主義を同一化することは、乗り越えられるべきではなかったであろう、第一歩であった。

分析の悲劇的な誤り、行動における悲劇的な誤り―誤りは、確かに、一九三二年夏以降、プロシアで社会民主主義の権力に反対するパーペンのクーデタの時、突破口に置かれ始めた、しかし、単に真に後程修正された。その理由は、もしも指導者たちのあるいは下部組織のレヴェルで問題があるならば（余りに性急な逆転を理解し及び受け容れ得ない、そして、それは、そこで、それ自体として、幸せな現象である）、『ディミトロフ路線』が、是非必要であったために、ある時間を必要となった。

管理中の路線それ自体を、路線を忘れる必要性がなかったであろう。なお一九三四年で、オーストリア＝ファシズムに

対してオーストリアの抵抗の失敗の前に、ディミトロフは、もしもオーストリアの労働者たちが、敗北されたならば、それは、プロレタリアートの独裁を代表する、『労働者諸評議会』が、それらの評議会の直接の行動の中心になかっただからである、考えを自然発生的に表明しないであろう……。

次いで、ディミトロフは、『段階』の概念を定義するようになるであろう。

ある意味で積極的な段階。しかし、段階それ自体は、抱き込みに陥り易い。

それは、その上に、実は、われわれは、仕上げるように願うだろう。なぜなら、どの貢献は、ディミトロフの異常な自己批判を引っ張ったか。しかし、同時に、どの欠陥は、なおディミトロフの報告を明らかにしたか、そして（従って？）どの曖昧さは、諸人民戦線の戦術／戦略を隠し持っていたか。

しかし、その前に、ドイツ共産党それ自身は、時折、ある自己批判に専心したことを、証明する必要がある。しかしながら、強い相対的な自己批判。幾つかの例に与えよう。

そうすれば、実は、社会民主主義者で、『小さいツェルジーベル』を作ることにあるテーゼ、その抑圧的な役割のため、それによって、有名な一指導者にそれを同一視するテーゼは、一九三〇年以来、行動における及び下から統一をブレーキを掛けると見なされた。しかし、常に、ここにしばしばメルカー Merker、ノイマンのような、身代わりの山羊の役目を果たす、かような個人もしくは集団について、誤りを拒否するように傾向と一緒に……。同様に、ノイマンに割り当てられた、ファシストたちが見られた至る所で、ファシストたちを叩くようなスローガンは、最後に、誤ったと見なされた。すなわち、考察に対して、誤りは、とくに、そこで同様に、ファシストの指導者たちと下部組織を混同することにあった。しかし、スローガンは、やはり、その実践的な必要性を持っていた。そして、余りにしばしば、そうすれば利用されていないエネルギーは、事実、社会民主主義者たちに反対して、再雇用された。それは、少しも事業に対して作り上げなかった。

プロシアで統治する社会民主主義者たちに対して、明白に—長い間、コミンテルンは、傾向に反対する—、ナチ党員たちとあるいは一九三二年で、フォン＝パーペンと前進するように避けることに傾向がある。しかし、しばしば、これらの転換点が、単に口先だけで適用されたことを振舞った、これらの進展の遅ればせの性格、指導部の対立、そして時折、コミンテルンのマヌーヴァー、時間通りに、これらの方向転換を『消化する』のに対して、下部組織の理解のある困難は、ドイツ共産党の政策が、重く、コミンテルン第六回大会の誤りによってマークされた結果として生んでいた。もしも第六回大会が、よく経済恐慌を予想したならば、コミンテルン第六回大会は、その代わりに、恐慌に対して社会主義の出口の方法を関係する、そしてとにかく、資本主義を『強固に仕直し』ながら、ファシズムを、恐慌を利用するように妨げるような手段を関係する、重大な政治的誤りを犯した。

有名でない事実—誤りは、悲劇的に、ヒトラーの政権の座にある接近の後、続けられる。一九三三年四月一日、コミンテルン執行委員会幹部会は、ヒトラーが、ドイツを経済的破局に導くことを予言する。なお一九三四年一月で、イタリア＝ファシズムの安定性を主張する人々の前に、ヴィルヘルム＝ピークは、ドイツの工業的前進、ドイツの労働者階級の伝統、中産諸階層の幻滅が、ナチズムの近い崩壊を引っ張るであろうということを、答える。もちろん、一九三四年六月三〇日の『長いナイフの夜』は、—歴史が、否認するであろう—、そして、一九二三年で、クララ＝ツェトキンが、すでに、イタリア＝ファシズムについて、用心した、この解釈を単に確認させる。

だからと言って、テールマンのあらゆる態度を理想化しないで、一九三三年二月七日のドイツ共産党中央委員会の非合法な会期（一九三三年二月七日でドイツ共産党中央委員会の非合法な会議、ディーツ出版社、ベルリン、一九八四年、参照。）の時—彼が逮捕された少し後で—、テールマンは、だからと言って、闘争の意思を放棄しないで、もっと少ない楽天家、もっと多く現実主義者であることを示したということを、われわれに、しかしながら、注意する必要がある。

ディミトロフに関して、彼が、即座に、一九三五年の態度について、奇績的として、到着したと考える必要はなかった

であろう。なお、一九三四年二月で、オーストリア労働運動の悲劇的な失敗を分析して、オーストリア労働運動が、直接の目的として……労働者諸評議会を固定しなかった事実に、一部分はその失敗を認める。そして、第七回大会の前少し出版された、ウージェーヌ＝ヴァルガ、恐慌（ウージェーヌ＝ヴァルガ、恐慌、ジャン―シャルル Jean-Charles とセルジュ＝ヴォリコフの序論、社会出版、一九七六年。）の書物の読み方は、ある意味で、一九二八年の大会と一九三五年の大会の間、道の中途で進め方、内部の軋轢の免除されない進め方を暴露する。

同様に、ディミトロフの分析と、すべての国家独占資本主義が、ファシストである、すでにR＝P＝ダット（R＝P＝ダット、ファシズムと社会革命、ロンドン、一九三四年、すなわち、仏訳、ファシズムと革命、パリ、国際社会出版、一九三六年。）で想い起された―分析のように、部分的に矛盾した分析の間の共存は、あり得た。それは、ローズヴェルト、ケインズについて……同じくフランスの人民戦線について、決して考察を容易にしない。同じダットは、その上、一九三二年一一月で、ブルジョワジーによってヒトラーの選択が、理由として、ドイツ共産党の切迫した勝利の脅威を生んだということを、あくまで断言した。国民社会主義ドイツ労働者党が、一、四〇〇万票から一、二〇〇万票まで大きく低下したのに、ドイツ共産党が、六〇〇万票を軽く触れるまで進行したし、地方選挙において進行し続けた、無視し得ない事実に基づく、思い出して『勝利過信の』テーゼ。単なる、しかしよく事実の軽い部分は、この解釈において、疑いもなく、ドイツ共産党の上昇が、彼の側で、物事を困らせることになったであろうのに、国民社会主義ドイツ労働者党の低下が、労働者たちの増大された搾取の上に建てられた恐慌に対して、資本主義の出口の可能性をもはや困難にしないように、独占企業は恐れたことである。しかし、ドイツ共産党の勝利から、一九三二年一一月で、ドイツ社会民主党は、後退しただけに、それに問題になっていなかった。

しかし、第七回大会に対して、ディミトロフの主要なテーゼを引き出そう。人々は非常に図式的に、その四つのテーゼを区別することができる。すなわち、

―共産主義運動は、ブルジョワ議会民主主義の性格について、セクト主義の誤りを犯した、
―共産党員たちは、非常にしばしば、大衆の基礎のない強権的な諸制度とファシズムを混同した、
―政権の座にある到達したファシズムの準機械的な崩壊のテーゼは、重い誤りであった、
―社会民主主義の機能の分析は、余りにも一方的であった。（ドイツ民主共和国の認識、四号、一九七六年一二月―大会の参加の出版について、そしてエルフリーデ＝レヴェレンツ Elfriede Lewerenz 及びエルヴィン＝レヴィン／ホルスト＝シュマハァー Erwin Lewin/Horst Schumacher の二つの研究について、における、クロード＝マンフロワ、『歴史家たちは、ファシズムに対してドイツ共産党の政策を分析する』、参照。）

この自己批判は、掛け替えのない経験のままである。しかし、問題は、諸人民戦線の方向の決定を創設した、この分析が、これらの点を、当時否認された、あるいはとにかく過小評価された、他の構成要素と連結するのを忘れなかったかどうか知ることである。

婦人たちの、青年たちの分析は、われわれに、非常に機械論者のままでいるように思われる。そして、もしもヴィルヘルム＝ライヒ Wilhelm Reich の綜合が、極度に折衷主義を奉ずるならば、少なくとも、彼は、問題提起及び本質的な諸任務を手加減をして触れるという、掛け替えのない長所を持っていた。非常に遠ざけない方向において、ポリツェル（仏独関係、一九三三―一九三九年、パリ、国立学術研究センター、一九七六年、における、A＝ギセルブレヒト A.Gisselbrecht、『一九三三年と一九三九年の間、フランスでナチ現象の幾つかの解釈』、参照。）が、後で愛着を覚えるように試みるであろう、ファシスト象徴体系の分析は―、非常に不十分のままである。ナチのイデオロギーの下書き（下書きが、その混乱によって、独占企業に仕える事実は、独占企業によって初めから、下書きが、命令されることは、意味しない）とある階層によってそのレセプションの間に弁証法の分析と同様に。ベルリン人のハンス＝ジェガー Hans Jäger が、しかし、あらゆる使用の用心を選択しながら（誠実さによってにせよ、慎重さによってにせよ、彼は、機会があれば、ブランドラー及びトロツキー主

義者たちを批判した）、しかし、一九二三年のクララ＝ツェトキンよりもはるかにもっと了解されないで、一九三二年で、インプレコールにおいて、豊かなやり方で、反省した、社会諸階層で。

諸人民戦線それ自体の考え方に関して、諸人民戦線は、下部諸委員会の役割の不十分さによって、不可欠の及び動機を与える―社会の再分配の諸措置に対して、しかし、多くの経済的権限及び構造が、支配諸階級の手とともに残った時から、弱い経験に対して、経済的諸変化の制限を損なわなかったか。すべてのケースでフランスで―本質的な問題は別にしても、すなわち、スペインで干渉しないながら、次いで、ミュンヘンの譲歩まで進行しながら、人民戦線の崩壊につれて、人民戦線は、ドアによって、成功裡に、現実の内部のファシズムを追い出しながら、知らぬ間に、窓によって、―すなわち、ヒトラーの軍事的な勝利の及び続いて起こった、協力の見地によって―、ファシズムを再び導入しなかったか。

最後に、もしも考えが、直ちに諸評議会及びプロレタリアート諸独裁を創設することを願うことにあった、一九二八年の誤りの理由で包括的であるならば、『諸段階』によって考えは、いささか、諸展望と行動を麻痺しなかったか。ついに諸社会運動の複雑な、少し一本調子の弁証法の代わりに置くに至るか。

われわれが、ディミトロフの自己批判とその自己批判が描いた諸展望に対して、表明するであろう、主要な貯えは、そのようなものである。

時折、不十分な、不安定のあるいは同じ矛盾した、マルクスとエンゲルスのアプローチ……。コミンテルンの及びマルクスとエンゲルスの考えのそのような明白な『経験』を、党の側で、否認するように仕向けた、ドイツ共産党の独自の状況。―例えば、マルクスが、一八七七年で、十分にはっきりと、自分の考えを表わした、議会主義について……。ともかく、事実、マルクス主義の労働運動が、諸ファシスト運動の及びそれらの運動に対して、採用すべき諸態度の分析に関して、迷惑を掛けたことは事実である。たとえ、歴史が、正確に決して繰り返されないということは、真実であるにしても、

問題は、疑いもなく、今日、完全に解決されない。

この研究は、単に、主な困難の諸地帯、すなわち、『アカデミックな』単なる知識人たちに、しかし—これらの最後の知識人たちと相互作用として—『社会運動の実務家たち』に、集団的である前に、学際的な……及び控え目でない、この考察の延期を『印を付け』たかも知れない。(三)

この論文は、諸ファシズムに直面して、マルクス主義の分析と闘争の諸道具を—、国民社会主義に直面して、ドイツ共産党の場合に、諸起源（マルクスとボナパルト主義、エンゲルスとブーランジェ主義）を論ずる。(四)

六

第六の論文は、マルタ＝ビカロンド Marta BIZCARRONDO（スペイン問題研究者、マルクス主義研究協会、マドリッド自治大学）『コミンテルン第七回大会とスペインにおける労働者階級』である。論文は、五〇年振りで、回想されている。

コミンテルン第七回大会によって押し付けられた諸人民戦線の政策が、最も多くの反響を及ぼした、二つのヨーロッパの国は、疑いもなく、スペインとフランスである。スペインの諸問題について利害の関係のある不足に対して、一〇年の初めに、ディミトロフとトリアッティの有名な原文は、それを証明するように、増大する不安は、後を継いだ。しかし、ファシズムに対して、この反対の一〇年の最も興味のある諸事件の間に、これらの歴史的諸事件は、よく知られていない。一部分は、参考資料の不足によって、すなわち、説明できなく、一九三一年と一九三九年の間、スペインに関係のあるコミンテルンの諸資料は、『エルコリ』の諸報告を除いて—、スペインで色々な代表たちの諸報告と同様に、われわれに知られていない。

そして、スペインで政治的進展の諸状況は、残りの仕事をした。すなわち、軍事的独裁の四〇年後、われわれは、当時、

入手できる原文を照らして、共産党の政策が代表した問題の研究は、何の役割を演じなかった、大部分、現在の社会党に対して、あるいは無条件の日和見主義に対して刷新された、結び付けられた歴史的研究の出である。スペイン共産党の『公式の』歴史が、党の時代で、この妨害を克服するためもはや成功しなかったように、われわれは、逆説的な状況において位置する。すなわち、一九三四年から労働運動において共産主義の中心的な役割は、歴史家たちにとって、疑う余地がない、そしてしかし、われわれは、この時期について、研究の基礎原理が不足する。共産党の指導集団（ヨゼ＝ディアツ José Piaz、ペドロ＝チェカ Pedro Checa）の最も明晰な会員たちが、姿を消した、一九三九年に続いて起こった、悲劇的な基礎原理は、この難解さの維持に貢献したことを、やはり言う必要がある。

それにもかかわらず、そしてなおわれわれに、諸資料が不足する事実もかかわらず、われわれは、スペインの共産主義運動の歴史において諸人民戦線のこの構想期間の時期が、代表する問題を、力説する義務がある。

われわれは、一九三一年と一九三四年の間、地方の除外にもかかわらず（アストリアス、セヴィル、バスク地方及びある側によってマドリッドのように）、共産主義が、単に、スペインで、諸地方によって、社会党員たちとアナルコ＝サンディカリストたちによって支配された、労働運動において、根本的な組織であったことを、想起する義務がある。一九三三年から、そして共和派の改良主義に直面して右翼の再上昇の前に、異端的の共産党員たち（コミンテルンに結び付けられなかった）と社会党員たちは、地方の枠内で（カタルーニャで及び穏健なアナルコ＝サンディカリストたちの勢力でもってアストリアスにおいて）あるいは地域の枠内で、上部組織で統一戦線を配置した。当時、『階級対階級』という態度において強ばった、スペイン共産党は、これらの戦線の外に、『社会ファシズム』を非難した、諸原理に忠実な態度を取り続けた。それは、単に一九三四年夏に、カトリック教の右翼を政府に対する参加に反対して、労働者の蜂起が、準備されたことをはっきりした時、実は、スペイン共産党は、この統一戦線政策を適用する、そして労働者諸同盟に加わる決心をした。それのお陰で、スペイン共産党は、ぎりぎりに、後になって党の正統性が、展開した、一九三四年一〇月の労働者の

反乱に参加することはできた。

第七回大会の政策は、次いで、すでにスペインでその前に進行状態になった、共産党の展望に固めるようにするであろう。それは、辛うじてディミトロフが、コミンテルンの指導部を引き受けたならば、コミンテルンの最初の非難の一つは、統一戦線政策のセクト主義の及び狭い彼らの適用のため、スペインの共産党員たちに反対されたとしても、奇とするには当たらない。一九三四年七月の決議は、この観点から、十分にはっきりしている。

要するに、スペインに対して第七回大会によって定義された、戦略の適用（そして、スペイン共産党が、狭義で、当時、コミンテルンのスペイン支部である、そしてスペイン共産党が、いわゆる政治的路線の周到な作成において自治を持たないことは、われわれが、納得させるという理由で、そうすればわれわれは、話す）は、一連の特殊性によって特徴づけられる。すなわち、

一、戦略の適用は，革命的な表現が、一九三四年一〇月で敗北された、労働者大衆の統一された強い圧力によって定義される、非常に具体的な歴史的状況とつながる。すなわち、

二、戦略の適用は、戦略上の変化、コミンテルンよって決定された、修正を反映する及び押し付けないようとしている、相対的に少し経験に富んだ（少なくともフランス共産党と対して）、小さい共産党について、コミンテルンの諸指令の投擲を仮定する。

三、スペインの労働運動の独自の特殊性の理由で、われわれは、他の空白に偶然出合う。それは、戦略上の最小の証明なしで、革命的な過激化の過程を着手したばかりである、社会民主主義の空白である。それは、労働運動の内に、共産党の主導権の実現のため、決定的な前進を表現する。

四、消極的な代償として、それは、共産党のランクまで含めて、成熟の不足が明白である、分割された、異端的の労働運動において生じる。逆説的に、人民戦線の政策が、第七回大会より以前の、しかし実際には、一九三六年で現われる、

例外的な諸状況にもかかわらず、スペインでその誕生を検討すること、この政策が、かなり深く、社会的な組織において、浸透するように決して成功しなかったことを整理する問題は、単なる可能な解決、すなわち、スペイン共産党の解決が、事実、人民大衆において、労働者意識において支配を目指すことを、決して許さなかった。(五)

スペイン共産党と諸人民戦線

コミンテルン第七回大会の政治的路線—そして特にその中核、人民戦線の戦略—が、党の創設と一九三四年夏の間、スペイン共産党の生活を特徴づけた、疎外と失敗の連続の後、スペインの労働者の政策の軸として、共産主義の積極的な変化にのしかかった、決定的な比重について、歴史家たちにあって、広範な一致があるように思われる。はっきりしないこと、それは、一九三五年六月二日、開催した、集会の間に、マドリッドの記念建造物の映画館に対して、ヨゼ＝ディアツの演説でもって、一九三四年一〇月の労働者の蜂起と新しい政策の公の定義の間のこの変化が、作られた、過程である。労働運動の歴史家たちは、国家の諸文書から来る孤立されたデータと同様に、モスクワのマルクス＝エンゲルス＝レーニン研究所から来る、—まったく、コミンテルンの代表たちの諸報告及び時期の間指導部の諸集会の諸報告書が欠けている—、マドリッドでスペイン共産党の文書館に預けられた、マイクロフィルムの基金の漠然とした問題点を解決するため、配置する。そこから、われわれは、再構成を試みるであろう、そしてわれわれは、幾つかの仮説を印を付けるように試みるであろう。

人民戦線のその意味において、同盟政策の発展は、一九三五年五月から確認される（四月の深い危機の後、政府におけるジル＝ロブレース Gil Robles の影響力に反対して、民主主義的な連合の状況において、われわれは、党に対してよく多数の内部的な原文によって、それを知っていると同様に）、同盟政策の発展は、公に、記念建造物の映画館に対する集

会において定義される、そして、第七回大会に対してスペインの指導集団の参加の後、共和党員たちと社会党員たちと選挙同盟協定、人民戦線のいわゆる協定（一九三六年一月一五日）の署名においてその完全な実現を見付ける、政治的諸関係の組織網に対して、次につながりながら、同盟政策の発展は、一一月で再開される。（マドリッドでパラディナス劇場におけるヨゼ＝ディアツの集会。）この展望から、スペイン共産党の軌道は、フランスで実験された及びコミンテルンの指導集団によって同一視された、路線のスペインの政治的生活について放擲であるように見える。

図らずも、スペイン共産党の及びロンドンの公共記録局の諸文書のデータによれば、われわれは、なお他の事柄を知っているのに。すなわち、もしも人民戦線の路線の実際の発展が、われわれが、指示したばかりである、暦に続いて起こるならば、それでも、アストリアスにおいて成功に関してコミンテルンの態度の決定の結果として（一九三四年一〇月五日から）、反ファシズム人民戦線の命令（この形態の下にあるいは『反ファシズム人民連合体』もしくは『反ファシズム人民連合』の形態の下に）が、スペインに賛成して創設されることは、―われわれは、賛成してそして賛成の中にではなく、主張することは、確実である。―フランスでほとんど同時に、それは、新しい戦略の採用において、コミンテルンの指導部の役割に関して、必ず一つの方向を持つようにする。

このスローガンが現われる、スペイン共産党の最初の宣言書は、蜂起の章の終わりの少しの数日後、緊急の総括である。『スペインの、カタルーニャの、バスク地方の及びガリツェの労働者たちと農民たちに』という宣言書は、一九三四年一〇月二七日の日付の記載がある（ナントでモーリス＝トレーズの演説の三日後）、そしてそれは、『反動とファシズムに反対して、レルー Lerroux―ジル＝ロブレス政府に反対して、闘うことを願う、すべての人々を、唯一の反ファシズム連合体として集めること』、という、この目標が固定される、『あらゆる地域の及び地方の委員会に対して』、党の内部にある回状の公の翻訳である。『われわれの党―この明かす原文は、結論する―は、スペインで反ファシズム闘争の指導する軸に変化しなければならない。』労働者たちと農民たちの諸同盟と組み合わせは、―なお下部組織での統一戦線の考え方の

比重を反映する。しかし、歩調は、国際通信誌の一一月号において、コミンテルンの名で、『エルコリ』（パルミロ＝トリアッティ）が与える、公式の説明の幾つかの側面を意義深い及び接合される。同じエルコリは、数カ月の結果、彼が、理論的に、スペイン共産党によって活用された人民戦線政策を設立するであろう、新しい諸論文と一緒に、干渉するであろう。『民衆の反乱』としてアストリアスの諸事件の特徴は、同じやり方で、たとえ人々が、革命においてソヴィエト（会議、協議会）の役割について伝統的な決まり文句を使用し続ける、等にしても、急転換を指示する。

そのように、イギリスの外交の諸関係は、スペインの労働者たちの闘争の反ファシズムの側面を重要視する、ソヴィエト出版物の雑誌において、新しい明るみをもたらす。すなわち、『反乱についてイズヴェスティア紙の世論は、一〇月八日のトップ論文において述べられた、モスクワで大英帝国の大使は、書く、その世論が、『ブルジョワ民主主義革命』からファシスト反革命まで……移行によって突如開始されたことである。同様に、労働者たちは、ドイツで及びオーストリアで突発された最近の諸事件によって、疑いもなく着想を与えられた、ファシストたちが、政府を奪った最中に、行動するようにできる状態にあった。その反ファシズムの性格によって、反乱は、国際的意義を持っているし、労働者たちの力と決定を過小評価する、すべての人々に対して、警告に仕えねばならなかった。』数日後、プラウダ紙において、反乱の敗北の後、ベラ＝クンは、『民主主義的自由』のため、模範的な闘争として、その敗北を呈示する。

なぜ、人民戦線のスローガンの基礎、この呈示であるか。対外政策の考慮及びコミンテルンによってファシズムをブレーキを掛けるため、諸行動に与えられた優先権が、スペインで、『人民戦線』の性急な接木の決定する諸要素であり得たということを、われわれは考える（人々は、ほとんどその時機尚早の定着について話すことはできるであろう）。ソヴィエト指導者たち（あるいはコミンテルンの？）は、社会主義革命のための闘争中に、スペインで、革命的プロレタリアートのイメージが、民主主義的強固の態度に対して重大な不都合を呈示したということを、考えねはならなかった。すなわち、諸事件に対して、新しい意義を与える必要があった。そして、たとえ労働者のミリタンたちに話し掛ける内部における演

説が、なお過去の反響を保持した（特に、下部組織での統一戦線のヴィジョンとソヴィエトの形成の目標に関して）とはいえ、反ファシズムの側面を強調する必要があった。曖昧さ及び一九三五年の間中、共産党の演説の二重の言葉は、この主義主張に帰すべきであろう。同じくらいの難解さ及び一九三五年五月—六月まで、そして同じくこの日付を越えて、『人民連合体』あるいは『反ファシズム人民連合』の政策の往復運動は、それに言う必要がある。社会的な及び政治的な活力が、同じ時期に、フランスの人民戦線に供給したことを、この明快の過程は欠けていた。

しかし、第七回大会の周りに、コミンテルンの政策が、スペインの共産党員たちについてくっきり浮かんだ、主な側面を要約することは有利である。われわれは、その手段によって、統一戦線政策の適用、労働者諸組織の統一の諸目標及び人民戦線の戦略の厳格な適用を理解する。

これらの問題は、スペインの代表の指導者たちによって、すなわち、『ガルシァ Garcia』（書記長、ヨゼ＝ディアツ）、『ヴェントゥラ Ventura』（ゼズゥス＝ヘルナンデェツ Jesus Hernandez）及びドロレス（ドロレス＝イバルリ）によって、コミンテルン第七回大会に対して、それらの主な干渉において取り組まられた。その第七回大会が、革命を主張する及び人民戦線の新しい展望を離れて残す、伝統的な調子をそれによって優ることは、言う必要がある。スペイン共産党の指導者たちは、アストリアスの英雄的な闘争を横切って、革命的な過程において主導権に到達されるものとして現われる。『パシオナリィア Pasionaria（情熱）は、コミンテルンによって常に首尾一貫した路線の正統性を確認した。『プロレタリアートは、一時的な敗北を耐えた』と、彼の意見によれば、改良主義の社会党員たちによって妨害された、闘争において、共産党員たちによって征服された主導権を説明した後、ヨゼ＝ディアツは、言った。それまでのいきさつについて長い説明及び革命の展開の後、統一戦線は、中心的な目標として現われる。そして、最後に、四つの点について、非常に急速な綱領と一緒に、労働者たちと農民たちの諸同盟の周りに創られた、その連合体の投擲のように『反ファシズム人民連合体』として現われる。すなわち、避けられない恩赦を加えて、そして、少しも土地の没収及び虐げられた国籍の自己決定でな

い、『労働者階級の生活の及び労働の諸条件の』いつもの改善。

実際上は、統一戦線と人民戦線の間のこの組み合わせは、描写されたやり方で機能を果たさないであろう。確かに、一〇月に続いて起こった数カ月の間、統一された圧力は、一〇月で、共同闘争が展開された、ビスケー地方 Biscaye のような諸地帯において特別の力と一緒に、労働者の（時々、『及び農民の』）諸同盟の広範な普及によって表現される。一九三五年六月で記録された二〇〇の同盟の間、約六〇の同盟は、ビスケー地方に属する。そして、そこで、諸同盟の水平の定着でただ問題がなかった、でも地方の労働者同盟の上部組織にまで、仕事場の及び工場の有名な諸同盟によって構成された下部組織以降、諸同盟のピラミッドの構成で問題があった。就中、妨害は、急速に現われる。アナルコ＝サンジカリストたちは、単に例外的に、アストリアスにおいて同様に、参加する。そして、社会党員たちは、行動的な諸機関で諸同盟の変化を拒む。（そして、ここで拒否は、ラルゴ＝カバリェロそれ自身から発する。）この瞬間から、その下部組織の強い圧力に立ち向かうよう恐れる、社会党の指導部は、決定の諸機関のような諸同盟について、議論の追跡と、労働の場所について、諸同盟の増加を妨げるように、上部組織で、連絡諸委員会の受諾によって、その圧力をブレーキを掛けるようと試みた。

労働者総同盟ＵＧＴ委員会の諸報告書は、一九三五年一月一七日、断定的なこの態度の決定を反映する。すなわち、『カバリェロ同志は、構成される問題、それが、連絡諸委員会であり、そして諸同盟でない、そして、すでに諸協定が、この問題に関して採択されることを、評価する。これらの連絡委員会は、地域を受け入れる、諸組織がある、地域において構成されるかも知れない。すなわち、しかし、工場諸委員会が構成されるため、何の理由はない、工場諸委員会において、単に代表たちの組織に従わせた、それぞれの組織の代表たちであるかも知れないであろう。』

人民戦線の諸機関を統一戦線の諸機関について溶接するため、統一戦線の諸機関として、諸同盟を一般化するように共産党の展望は、そうすれば、一九三五年に沿って、それが、スペインに対して第七回大会の政策の適用の中心点であった、

事実にもかかわらず、手詰りのままであるであろう。『反ファシズム人民連合は、ヨゼ＝ディアツは一九三五年六月二日、記念建造物の映画館の彼の演説において、言う、労働者たち及び農民たちの諸同盟に基礎を置かなければならない。』彼は、第七回大会に対して、彼の干渉において、同じ事柄を繰り返した。『ファシズムを打ち破るため、本質的な条件、彼は、一一月三日、パルディナスの説明的な演説において、確認した、それは、われわれが、社会党員たちと共産党員たちの間に統一戦線を作り上げるであろうということである。その理由は、それは、反ファシズム人民連合体の有効な働きの基礎である。』

社会党の拒否は、この推進力を止める。しかし、今年の終わりに、やはりますます接近する国政選挙の展望は、介入する。このやり方で、下部組織でのつながるのに到達しないで（人々が、階級的意識のレヴェルに対して、統一を呼ぶことはできる問題を、現実に存在したのに）、人民戦線は、スペインで、恩赦の緊急によって苦しめられた労働者諸党に対して、本質的な何の譲歩をしないであろう、共和派の左翼の諸党によって交渉された、選挙連合の輪郭を引き受けるであろう。スペイン共産党は、そうすれば、党が計画した、人民戦線で非常に遠ざけた、そしてその社会的な支持と関係なしに、ある人民戦線（党が二次的な地位を占める、次いで党が議論のテーブルに座ることさえできない、交渉において）の現実を引き受けねばならないであろう。組織的な領域における相対的な失敗が、一九三六年二月から（一六名の議員たち）及び先ず第一に、労働者階級の内部でその増大する役割によって、議会の勢力によって償ったように見られるであろうことは、真実である。

それは、社会党員たちと共産党員たちを統一するであろう、過程のため、衝撃を供給する、労働者の基礎である。それは、ディミトロフの報告によって、第七回大会に対して描かれた新しい政策の要点の一つである。それは、この点は、ヨゼ＝ディアツが、スペインの労働者たちの前に、大会の総決算を提出する、一一月三日の議論の中心部を構成するとして、奇とするには当たらない。諸結果は、不平等であろう。すなわち、労働組合の統一、先ず、次いで青年問題の統一、しか

し、長い期間において、たとえスペイン共産党が、特に戦争の時代で、有効な『宣伝熱』の補償を見付けたとしても、『プロレタリアートの唯一の党』の構成における失敗。

再び、この過程は、非常に急速に、ラルゴ＝カバリェロ、イクオール、恵まれた対話者の控え目によって中断された。一〇月の反乱の失敗の少し後、最初の歩調は、一九三四年一二月七日、共産党の提案について、曖昧な決まり文句によれば、『われわれのキャンペーンの核心を構成しなければならない、直接の諸目標を研究するのに』身を捧げねばならなかった、社会党員たち及び共産党員たちの諸党及び諸労働組合の間の連絡委員会の創設で乗り越えられた。連絡諸委員会は、労働者諸同盟のための政綱に仕えるであろう、しかし、それらの委員会の影響は、やはり社会党の指導部の行動によって小さくなるであろう。後に、社会党の左翼が、完全に統一の展望を引き受ける時でさえ、問題は、スペイン社会主義労働党ＰＳＯＥの内部に移動するし、そうすれば、完全な内戦、イクオール、その間に、問題は、定期的に共産党の観点から想い起される時期まで、延びる。

労働組合レヴェルについて結果は、積極的であろう。すなわち、新しい雰囲気は、第七回大会後、創られる。同等のものを想定された二つの労働組合の間の協定の代わりに、非常に少数派である、統一労働者総同盟の労働組合センターは、社会党の労働者総同盟によって提起された入会の諸条件を事実受け入れるであろう。共産党員たちは、彼らが多数派になるだろう（一九三五年一一月の協定）、諸地域において除けば、労働者総同盟に入るであろう。（この決定）は、内戦まで実践において、その延期を見付けるであろう。社会党の主導権は、尊重されたように見えた。

やはり下部組織によって強力に強く感じられた、青年同盟の統一は、他の傾向を持つであろう。その組織的な発展は、ラルゴ＝カバリェロが、スペイン社会主義労働党の管理を失った時、そしてモスクワの、やはり象徴的な、指導部の下に、場所を占める。連絡諸委員会は、この領域に、一九三五年の第二の半分において一般化された。そして、一一月で、原則の統一について協定は、社会主義青年同盟連盟ＦＪＳに関して、融合で全面的であった。その書記、カリロ Carillo は、

一二月で、統一された社会主義青年同盟の形成の過程で、一九三六年春に極まる、『抵抗できない統一』について話す。

ディミトロフによって叙述された統一された計画は、そうすれば、共産党員たちのために、影響の重心を移動させる、スペインで社会党員たちと共産党員たちの間の諸関係に関して、広範な適用を見付けた。その計画は、諸党間の諸関係のレヴェルについて、単に失敗で終わった。

しかし、総決算は、そこで終わらない。一九三四年一〇月の諸事件によってマークされた、スペインの政策とスペインの労働者意識の特別な諸状況は、われわれが、急速に展示する義務がある、スペインで人民戦線の共産党政策の側面の三つの他の発展を可能にした。すなわち、労働者敗北後、抑止の犠牲者たちで連帯、知識人たちの接近及びカタルーニャで及びバスク地方で国民的性格に対する諸共産党の発展。

人々は、最初の側面の重要さを過小評価することはできない。その理由は、それは、市民社会において共産党の行動の主導権の主な支点である。過ぎ去った問題に関する、定義された意識化の前でさえ、人民諸階層について一〇月の大きなインパクトは、抑止の残酷さ（アストリアスにおける軍隊、数万の投獄者たち、彼らの仕事の他の解雇された人たち）が、連帯の強い行動によって、単に敗北された社会集団の間の結集力を発展させながら、短期に克服されることはできた、この印象から成り立つ。共産党の主導権は、とりわけ、厳格に物質的な諸理由のため、明白であるだろう。すなわち、社会主義インタナショナルは、この連帯の義務を拒絶する。そして、分配するのに資金は、ソ同盟から来る。社会党の指導部それ自体は、この分配のため、統一された諸政綱の創立を受け入れるべきであろう。一九三五年春以降、非常に広々とした地方の及び地域の諸支部で、抑止の犠牲者たちに対して、全国救助委員会は、作動した。それは、社会党員たちと共産党員たちの代表及び共和派の左翼の諸組織が、出席したであろう、全国救助諸委員会大会の、ヴァレンシアで今年の九月で、召集を可能にした。その場に指定された全国委員会は、一九三六年二月の国政選挙に対して勝利を手に入れた、社会的諸勢力の全体と一致する、同じ複数制の構成に照応した。恩赦を手に入れること、国政選挙の中心的な目標は、国政選

挙の結集力を同様に強化する。

知識人たちを非常に重要なこの約束に押した、主義主張は、同様にこの領域においてである。この傾向は、内戦の間、極まるであろう。一九三四年一〇月の前、接近の瞬間（一九三三年で、制度の変化で）があった。しかし、瞬間の影響は、一部分は、スペインのインテリゲンツィア（知識階級）の自治の伝統の理由で、そして階級的諸組織の（共産党員たちのあるいは無政府主義者たちのと同様に社会党員たちの）全体を特徴づけた、強い労働者主義の理由で、最小であった。しかしながら、活動の場を準備するであろう、諸現象があった。

一九三〇年代において、ソ連邦で社会主義の建設のため、大きな感嘆は、われわれが、ソ同盟の友人たちの会の加入者たちの名簿をそれを知ると同様に、大きな数が、全く急進党員たちでなかった、知識人たちのもっと広範な諸集団を感動させた。そして、一九三三年の間に、ナチ政策に反対する反応は、スペインのファシストたちの諸集団が現われ始めた、場所において、幾つかの反響を見付けた。（この運動の震央は、マドリッドの学芸の殿堂に対して、一九三三年三月から、スペイン共産党の反ファシズムの主導権において、その発動機を見出された。）それは、当時、実は、ファシズムに反対して及びソヴィエト＝ロシアのための二重の約束に対して、知識人たちを励ますように努める、一〇月雑誌の出版者、詩人ラファエル＝アルベルティ Rafael Alberti の中心の役割は、はっきりし始める。しかし、もしも名前が抜きん出たとすれば、行動の影響は貧弱である。一〇月の抑止後、同様でない。多数の名前の中のため、陣営の選択は、この瞬間から、義務的である。『アストリアスにおいて血塗れの抑止の年が到着した、必要があった、と、数時間後、若い作家は語る、すべての人、すべての詩人たちのために、われわれは、スペインを解放させた、運動に対して、われわれの仕事を通用させるよう、われわれの生活を合致させるよう、絶対的な義務として、強く感じた。』あるケースにおいて、それは、多少とも延期された闘士的活動（ほとんど常に共産党の）のデビューであった。他のケースにおいて、それは、人民の及び労働者たちの側に、完全な約束の態度であった。『世界におけるこの劇的な時期で、芸術家は、その人民と泣く及び笑う義

務はある』と、戦争は勃発する前、公表された最後のインタヴューにおいて、一九三六年七月で、フェドリコ＝ガルシア＝ロルカ Federico Garcia Lorca は、叫びを挙げる。

要するに、国籍の枠内でスペインの共産主義の特別の発展がある。この点は、興味深い。その理由は、この点は、続いて、そして今日まで、スペインで共産党の組織をマークするであろう。初めに、スペイン共産党が、ブルジョワ国家の崩壊の諸要素として、国民の（主にカタロニアの及びバスクの）特殊性を利用するため、特に一九三二年から、コミンテルンの固執がある。結果は、先ずカタロニア共産党、次いでバスク Euskadi 共産党、イクオール、二つの国民的共産党の相次ぐ出現であった。この最後のバスク共産党の創設大会は、一九三四年一〇月の諸事件によって遅らせた、そして、その創設大会は、一九三五年六月で、コミンテルン第七回大会に、スペイン共産党の代表の、モスクワのため、出発の数週間の前に、理由があった（第七回大会に、新しいバスク党の書記長、ジュアン＝アスティガラビア Juan Astigarrabia が、出席した）。ここで、自己決定のテーマが、第三回大会にヨゼ＝ディアツによって提出された、綱領の四つの点の一つであったことを、想起する必要がある。テーマは、しかしながら、これらの党の独立が、純粋にはっきりした、実行段階では、スペイン共産党の地方的諸連盟の諸党の法規が、維持されたことを、見出される。事態は、諸人民戦線の戦略の適用で変わるであろう。すなわち、当時、非常に違った指導部たちは、問題の二つの土地において持続的になるだろう。バスク地方において、バスク共産党は、戦争まで、バックに、その書記とヨゼ＝ディアツによって支配された指導集団の間の非常に悪い諸関係で、厳格にマドリッドの支配下にあるように続けるであろう。その他に関しては、バスクの国民的な政策についてその党の固執―一九三五年一一月で、人民戦線の典型的な述べ方の代わりに、反帝国主義戦線を、地方に対して、提案するに党を至らしめる―は、ナショナリストの労働者たちにあって、突破口によって表現されない。その代わりに、戦争の数カ月間、一九三七年まで、マドリッドに対してバスクの地理の孤立は、大きな自治を可能にする。そして、バスク共産党は、ナショナリストの方向でバスクの政府に対して参加しながら、国民戦線の政策を企てる。ビルバオ Bilbao

の互解の後、アスティラビアは、『追随主義』の告発の下に、党から除名されるであろう。そして、バスクの共産党は、従属に裏返した。

その代わりに、カタルーニャで到着した問題は、非常に違っている。そこで、諸同盟の及び第七回大会によって押し付けられた労働者統一の政策は、一〇月の敗北後、労働者諸勢力のあらゆる陣営において感じさせる、再組織に対して望みにおいて、有利な活動の場を出合う。統一の目標は、小さいカタロニア共産党が、それほどではなく、左翼戦線に対して党の参加によって（ここで同様に、ナショナリズムに対して二次的な態度にある、左翼戦線）、しかし、頂点が、時間において、一九三六年七月の軍事的蜂起と同時に起こった、この統一された過程の極に変化するため、その目標を役立たせることはできるであろう、事実である。それは、当時、実は、カタロニア＝プロレタリア党ＰＣＰと二つの社会民主主義の組織（カタロニア社会主義運動ＭＳＣとカタロニアのカタロニア社会主義労働党ＰＳＯＣ）は、共産党の主導権の下に、カタルーニャ統一社会党の中に根拠を置く。この状況は、今日は同じ状況のままである。[六]

第七回大会とスペインの社会主義

コミンテルン第七回大会は、要するに、ファシズムに直面して味方になるため、主な敵対者たち及び統一で望まれた過程の立役者たちであることを止めた、諸社会民主党に関してコミンテルンの態度の中に、重要な諸変化を紹介した。（たとえ人々が、『社会民主主義の政策の破産』を説明すること、Ｗ＝ピークの伝統のように、伝統に結び付けられた声を理解し続けたとしても。）ディミトロフは、もはや批判を慎重に準備しなかった。しかし、彼は、要が、党派的な社会民主主義を、この党派的な態度を拒否した、人々の統一から識別することであったことを、理解させた。ディミトロフの報告の中で、行動統一の到達点は、一九二〇―二一年で労働運動の中で理由があった。人々が、分裂を打ち勝つであろう、時

期であった。確信した問題、―アルド＝アゴスティは、それを強調したと同様に―それは、ブルガリア指導者によって提起された五つの条件が、常にボルシェヴィズムの影響の領域の中で、専ら連合を位置づけるのに価値が等しかったことである。ほとんど吸収で問題があった。

この側面は、一九三六年と一九三九年の間、スペインで後で、その役割を演じるであろう。一九三五年で、重要な諸部門は、社会党の左翼の諸部門であったし、スペインで、社会主義青年同盟の中で同様に、スペイン社会主義労働党の及び労働者総同盟のカバリェロ主義の部門の中で有利な分野があった。人々は、『アントニィオ Antonio』の偽名の下に、それらの誓いで、ファシズムに直面して及び世界革命のため、二つのインタナショナルの団結を呼ぶ、スペインの社会党員の大会に対して介入を想起させながら、このテーマの重要さの考えを作らせることはできる。『一〇月以降、と、彼の報告の中で、過度にそれに喜こばない、ゼシュス＝ヘルナンデェツ Jesus Hernandez（共産党員）は、解説するであろう、人々は、一般的に、大衆の中で、単に社会党ばかりでなく、無党にあっても、共産党員たちと社会党員たちが、共同協定で進む、そして少しの時間の中で、二つの党は、融合するであろう、印象を出会う。』

統一された圧力は、今年の間中、社会党の左翼の中で明白である（特徴的な例、すなわち、ルイス＝アラキスタン Luis Araquistain とラルゴ＝カバリェロの理論的な協力。）、しかし、それは、第七回大会の共産党の戦略が、採択された、社会党の左翼が、同質の戦線を呈示したということを、言うことを願わない。正しく逆に、その圧力は、一九三四年の革命的労働者主義に対して彼らの忠実さを保持する人々と、新しい推理に対して敏感である人々の闇に分裂される。カバリェロの分派のクラリダッド *Claridad* の週刊誌の反応は、週刊誌を反映する。多分大会に出席した、ジャーナリスト、ジュリオ＝アルヴァレェツ＝デル＝ヴァイオ Julio Alvarez del Vayo は、革命的な内容で反ファシズム戦線の賛辞を祝う、クラリダッドの中で確固として週刊誌を防衛する。（一〇〇　一九三五年×月五日。）しかし、論文を提出しながら、クラリダッドの編集が、ジャーナリストの観点の確実さに対して、その留保を表現することは、それでも重要である。その前の

一カ月、同じ週刊誌の中で、アルフレド＝カベロ Alfredo Cabello は、ブルジョワ民主主義でもってすべての協定を批判したし、労働者戦線を追跡するような必要性を力説した。彼は、八月一七日、大会に捧げられた彼の最初の論説において、彼が、熱狂さに新しい共産党の態度を挨拶したけれど、留保があることを指摘する。しかし、革命に対する統一された展望は、一つの事柄であった。他の事柄は、新しい諸同盟の戦略が想定した、問題を理解することであった。一九三五年一〇月一九日、クラリダッドは、スペイン共産党に対して、具体的に新しい政治的路線が代表する、問題を質問するため、スペイン共産党に問い合わせる。一〇月二三日、共産党の返答は、反ファシズム人民連合体のスローガンを及びブルジョワジーと断絶を要求する、統一された展望を強調した。（人民戦線が、『小休止主義』で持っていた問題のため、人民戦線に対してもっと控え目な、そしてこの理由のため、『ブルジョワジーとつながりを絶つよう』、誰よりももっと遠ざかった、『カベリェロ主義者たち』で摩擦の点。）他の議論ではない、しかし、革命の民主主義的局面の意味あるいは拒否を関係する、相違の刻印は、社会党員アラキスタンと共産党員ユリブ Uribe の間の論争に姿を映す。革命の中で、ボルシェヴィキ化されたスペイン社会主義労働党のあるいはスペイン共産党の―やはり討論中の問題―指導する役割を誰が持っていたであろうか、知っているばかりで問題はなかった。でも、もしも民主主義的局面を要求する必要があったならば、社会党の左翼について誰か実に重要でなかったか、知っていることは、問題であった。

これらの困難は、『カバリェロ主義』が、人民戦線を拒むことを、当然想定させない。すなわち、ある少数派に反対して、カバリェロ主義は、標準化のために条件として、完全に人民戦線を支持する（諸組織の合法的な生活、恩赦）。一九三五年四月一四日から、インダレツィオ＝プリエト Indalecio Prieto によれば、執拗に防衛された選挙の連合の中で同様に、しかし、カバリェロ主義の戦略上の組み合わせは、完全に欠けている。

マルクス主義の諸組織の統一に関して、はっきりと、労働組合レヴェルについて、社会党員たちにとって、積極的な、そして、中期の、大きく青年同盟に関する共産党の部門にとって、利益になる、諸結果は、非常に制限されるであろう。

それは、スペインの革命的な社会主義が、人民戦線の政策を引き受ける、制限を観察するため、特権を有する領域である。社会主義青年同盟の指導者、サンティアゴ＝カリロ Santiago Carillo は、―彼の書物の中で―リリ＝マルク Lily Marcou、是非とも共産主義、パリ　一九八四年とインタヴュー―、最近、コミンテルンの大きな指導者たちの能力の場について、説明を位置づけられた。実際には、ラルゴ＝カバリェロが、スペイン社会主義労働党（一九三五年一二月）の主宰を失う時から、共産党の路線について、敵方に寝返えり、青年同盟の連合を許すであろう、ソヴィエト＝ロシアのため及びボルシェヴィキ党のため、それらの感嘆の中で、社会主義青年同盟の接近の説明を探す必要がある。それは、この時に、実は、古い社会民主党をボルシェヴィキ化するよう、展望が、消え失せた。その上、二つの青年同盟の組織の間の接近は、（一九三四年）一〇月から、非常に行動的であった。『一九三四年の終わりから、二つの国民的な指導部の全国調整委員会があった―第二の共和制の中で、テュノン＝デ＝ララ Tunon de Lara が語る―、そして、地方のもしくは地域のレヴェルにおいて、二二の調整委員会があった。二つの組織の下部組織の多くの支部は、共同で働き始めた。それは、共産主義青年同盟のコミンテルン第六回大会後、若い共産党員たちによって、細胞の体系の放棄によって容易にされた……。』

しかし、人民戦線は、控え目なしで、引き受けられない（そして、社会主義青年同盟の議長、カルロス＝ヘルナンデェツ＝ザンカジョ Carlos Hernandez Zancajo によって指導された、正面のある反対）。選挙の協定の弱点は、正当化に仕えるであろう。一九三六年二月に、それらの改革の機関紙のために、問題は、常に革命の中で指導する役割の問題、ボルシェヴィキ党の問題である。『かかる党なしで、人民連合体は、われわれを、何の実用的な結果に導かなかった。すなわち、民主主義的革命は、ファシズムに帰着するであろう。』それは、社会主義青年同盟の当時の指導者たちについて、個人的な諸関係に責任はない、指導者たちが、すでに、内戦の間、スペイン共産党のものであった時（われわれは、党の諸文書の中に、サンティアゴ＝カリロの及びヨゼ＝ラン José Lain の諸文書を持っている）、党は、いずれかの方法で、この左翼主義の小児病にほのめかされる。

結局、第七回大会の政策が、統一された状況の理由で、スペインの社会党界の中で、強い衝撃を持っていた、しかし、幾つかの個人的な例外を別にすれば、第七回大会の政策が、統一が、その戦略を作り上げたのに、社会党の左翼の戦略の中に、入り込むし果せなかったということを、人々は、言うかも知れない。

結論

はっきりと、スペインで人民戦線政策の上昇を、ヨーロッパの他の諸国の上昇と区別する、要素がある。それは、一九三四年一〇月の労働者の蜂起の失敗後、連帯の感情が、人民諸階級の、及び特に労働者たちの意識にのしかかる、重さがある。同じ年の二月で、オーストリアで到着した問題と違って、敗北は、労働者左翼の諸組織の公な生活の中で、根本的な疎外を想定させなかった。数千のミリタンたち、主な社会党員の指導者たち（しかし、共産党員たちではない）は、投獄していた。しかし、生活は、例外の諸制度を横切って、続いた。共産党の諸新聞は、以前の時期におけるようなもっと高い、普及の数字を到達した。社会党の左翼は、通りの中で、クラリダッドという彼の週刊誌を普及することに成功した。一般的な印象は、敗北が、単に実際は、過渡的な不時の出来事であった、そして直に、共和派の民主主義者たちの支えでもって、人民諸勢力が、再び集まる義務があったことであった。一九三四年一〇月、続いて起こる数カ月の間、少なくとも、カトリック教の右翼のファッショ的な諸提案が、最小の結集力を見付ける、買収によってマークされた、共和派の右翼—急進党—でもってつながることはできなかったということは、はっきり、明らかにした。思いがけないやり方で、指導する役割は、その前年、アストリアスの抑止において、囚人たちを釈放する及び軍隊によって行使された残忍を告発するため、最初の機会を利用する必要があった、満場一致の感情によって結合された、敗北した人民諸階層へ移した。当時若い共産党のミリタン、歴史家テュノン＝デ＝ララは、この時期を想い起こす。すなわち、『そこで、われわれの人民大

衆のこの感情的な反応の中で、本物にスペイン人の何かはある。人々はこの感情的な反応で、人々が願う問題を考えることはできる。しかし、この反応は、すでに一九一七年で生じた。すなわち、カルタジェヌの監獄から囚人たちを出て行くように許した、一九一七―一九一八年の冬の間、統一された努力があった。それは、続いて起こる数カ月の間、四万の囚人たちと、一九三四年で農民たちのストの時と同様に、一〇月革命を繰り返されるであろう。『婦人たちの投票、棄権するように無政府主義者たちの拒否、その前の数世代の知識人たちの連帯の運動（バロジャ Baroja、ユナムノ Unamuno、ヴァール＝アンクラーン Valle Inclàn）は、一九三六年二月で、人民戦線の選挙の勝利が、その基礎を置く、スペインの社会の基本的な、この広々とした運動の諸表現である。

その代わりに、フランスのケースを考えながら、そのケースは、フランスで、アムステルダム及びプレイエル大会によって代表された反ファシズム統一の推進力を生じた、下部組織から、政治的な組み合わせの運動を欠けている。フランスで実現されたピラミッドのつながりは、人民戦線が、先ず第一に、唯一の共同の目的、すなわち、囚人たちを釈放することで、民主主義的左翼に対して、権力を照合するのに当てられた、選挙の左翼連合である、スペインで存在しない。一九三五年の最後の数カ月の時、共和派の頑固さに直面する諸問題があるだろう時、（投獄中）社会党指導者ラルゴ＝カバリェロは、労働者たちが、『非常に重大な恩赦の問題』の前に結び付けられた、足と握り拳を見出されることを告白するであろう。そして、この理由のため、共和主義者たちが、あらゆる彼らの諸条件を押し付ける、すべての構造的改良及び同時に交渉の時期の間に共産党員たちの影響力を拒否することは、受け入れる必要があろう。言葉の厳密な意味で、スペインで人民戦線で存在しなかったであろう。しかし、支払うのに非常に強い価格で、選挙の連合は、存在したであろう。すなわち、急進化された人民大衆の弱い約束、社会的定着なしで民主主義的政府の素直さは、人民の精力の組み合わせで欠けている。それは、内戦の決定的な時期に連れて行くであろう。従って、動員はあったであろう、しかしその上、何もなかったであろう。パルミロ＝トリアッティは、コミンテルンに対して、戦時の彼の関係の一つの中で、明晰で及び絶望して、

その約束を目立たせるであろう。すなわち、スペインで、人民戦線の諸機関のつながりに根拠を置かれた、『正式の民主主義的制度』は、決して存在しなかった。そして、この構造上の弱さは、その変化する能力及び同時にその『照合主義の』統合の潜在力をブレーキを掛けて、あらゆる反ファシズムの組織網に伝えられるであろう。それは、一九三六年二月と七月の間、民主主義の働きに対して、そして同様に、この日付から、有効に人民運動を組織するために、主な妨害の一つであった。はっきりした言葉で、スペイン共産党は、この欠陥を見分けることはできた。見知らぬ人は、生きて行く。すなわち、この妨害を克服するため、彼の政策の効力及びトリアッティの諸報告は、積極的な、しかしやはり悲観的なイメージを提供する。

確実である問題、それは、第七回大会と諸人民戦線の政策が、労働者界において、勢力諸関係の急進的な及び耐久的な変化を想定したということである。実際に、一九三四年一〇月革命の直前まで、離れて、共産党は、労働者たちの政治的展望の中心となった。社会党員たちは、共和派諸政党で一九三一―三三年の選挙の同盟をきっぱりと結び直すような社会民主主義の誘惑と、一九三四年一〇月で手短かに打ち切られた革命的な努力を再び企てるような左翼主義の誘惑の間に振動した。最良のケースにおいて、アナルコ＝サンディカリストたちのため、他の展望なしで、ファシズムに反対する及び恩赦のための努力を結合するような必要性は、重要であった。その代わりに、コミンテルンによって導入された変化のお陰で、スペイン共産党は、党の配置で、二つの大きな問題を解決するため、最強の切札を持っていた。すなわち、

―囚人たちを釈放すること及び選挙の連合の勝利によって恩赦を手に入れること、

―革命に向かって前進すること。

それは、少し集まりの解決不可能なことであった。そして、結果として、スペイン共産党は、労働者の政策の中心とならなかった。パルミロ＝トリアッティは、はっきり、それを理解することはできた。すなわち、『統一戦線及び人民戦線のための闘争の間に、―彼は、ボルシェヴィキ誌において公表された論文の中で、一九三六年一〇月で書く―、共産党は

大きくなった及び堅固になった、党の幹部たちを改良した。党は、大衆的ボルシェヴィキ党の創設の方へ大きな歩調を作り上げたし、大衆において大きな権威を獲得した。』量的なデータは、それ自身で話す、一九三四年一〇月の蜂起の前に、スペインで、共産党のミリタンたちは、一万二、〇〇〇人以下である。人民戦線の勝利の直前に、一九三六年三月で、彼らは、四万六、二〇三人である。軍事的な蜂起の月、同じ年の七月で、彼らは、一一万八、七六三人である。一九三七年八月で、彼らは、三二万八、九七八人であろう。共産党は、歴史的な重さが、最近の民主主義的な推移まで維持された、コミンテルン第七回大会によって定義された政策の路線の中で、中心的な役割を持ち始めた。あらゆる支離滅裂及びあらゆる敗北にもかかわらず、二重のイメージの確認は、問題である。すなわち、労働者階級の行動の及び民主主義の維持と実現のための闘争の、首尾一貫した表現として共産党。一九三四―三六年の状況に対して、この一貫性が、最後の一〇年の間に、スペインで共産主義運動の危機について、影響を持っていたことは、追い出す必要がない。しかし、この一貫性は、やはり、一九三六年と一九七七年の間、独裁に反対して労働者の抵抗の維持の中で、その指導する役割及び社会主義の希望を保証した。(七)

コミンテルン第七回大会の前に、時期的に早く生まれた、人民戦線の政策は、しかし、国の社会的な組織の中に深く入り込むことに決して成功しなかった。もしも、他方からすれば、人民戦線の政策が、労働運動において共産党の定着を助成したならば、人民戦線の政策は、その政策を支配をめざす態度を確保するような労働運動に対して許さなかった。それは、この論文が、結び付くことは、この二重の問題を説明すべきである。(八)

――一九九〇・一一・三〇、成稿――

(一) Cf. Claude Mainfroy, Le marxisme face aux fascismes, in: Cahiers d'Histoire de l'Institut de Recherches Marxistes (CHIRM), n°27 (1987), pp.65-70, 81. ソ同盟共産党中央委員会付属マルクス＝エンゲルス＝レーニン研究所編、マルクス＝レーニン主義研究所訳『マ

ルクス＝エンゲルス二巻選集』第一巻、カール・マルクス「ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日」一八〇―二五四頁、フリードリヒ・エンゲルス「住宅問題」四〇八―四七六頁、大月書店、一九五三年参照。ブーランジェについて、中木康夫『フランス政治史上』「ブーランジズムと共和制の危機」二六四―二七九頁、未来社、一九七五年参照、等。

（二）Cf. Ibid., pp.70-73, 81.

（三）Cf. Ibid., pp.73-81.

（四）Cf. Ibid., pp.2, 3, 65.

（五）Cf. Marta Bizcarrondo, Le VIIe Congrès de l'Internationale communiste et la classe ouvrière en Espagne, in: CHIRM, n°27 (1987), pp.82-84. 斉藤孝『ヨーロッパの一九三〇年代』「反ファシズム運動(二)」一〇一―一三六頁、岩波書店、一九九〇年参照。若松隆『内戦への道　スペイン第二共和国政治史研究』「分極的多党制下の政治危機」一五八―二二〇頁、未来社、一九八六年参照。E・H・カー、富田武訳『コミンテルンとスペイン内戦』「序幕」……「敗北の苦味」二七―一五九頁、岩波書店、一九八五年参照。トリアッティ選集委員会編『トリアッティ選集Ⅱ1』「スペイン革命の特殊性」「スペインの経験」二三八―二五九頁、合同出版、一九六六年参照。村田陽一編訳『コミンテルン資料集』第六巻、「スペイン勤労者支援のための第二インタナショナルとの交渉」八八―九一頁、「スペイン人民との共同連帯行動についての第二インタナショナルとの交渉」二四七―二五九頁、「スペインの人民戦線運動（1936～1938）の資料」五〇二―五一一頁、大月書店、一九八三年参照。J・J・L・ソベーニャ編著『スペイン人民戦線史料』法政大学出版局、一九八〇年参照。斉藤孝編『スペイン内戦の研究』中央公論社、一九七九年参照、等。

（六）Cf. Ibid., pp.84-91.

（七）Cf. Ibid., pp.91-96.

（八）Cf. Ibid., pp.2, 4.

付　記

（一）主要参考外国文献は、Jean-Luc Pinol, Espace social et espace politique, Lyon à l'époque du Front populaire, Presses Universitaires de Lyon, 1980. Bernard Pudal, Prendre parti, Pour une sociologie historique du PCF, PFNSP, 1989. Jean-Claude Gayssette, Le Parti communiste français, ES, 1989. Pierre Miquel, La Troisième République, Fayard, 1989. Michel Winoch, Les années trente, De la crise à la guerre, Ed. du Seuil, 1990. CHIRM, La CGT et la culture, Sommaire n°41, 1990 等である。

（二）筆者は、CRHMSS, Bulletin n° 13, 1990（パリ、九月一八日発信）を寄贈されている。フランス人民戦線の時期は、一九八九―九〇年中で二一〇種（Jean-Louis ROBERT: Ouvriers et mouvement ouvrier parisiens pendant la Grande Guerre et l'immédiat après-guerre. Histoire et anthropologie, Université de Paris I. Thèse de doctorat d'Etat ès Lettres et Sciences humaines, Soutenue le 18 novembre 1989. Directeur: Antoine PROST. Jacques GIRAULT: Les Varois et le socialisme 1920-1935, Université de Paris I. Thèse de doctorat d'Etat ès Lettres et Sciences humaines, Soutenue le 24 février 1990. Directeur: Maurice AGULHON, Professeur au Collège de France. 等の博士論文 Thèses 一〇種、修士号論文 Mémoires 一〇種）である。合計、外国で八二一種、国内で五五三種、合わせて一、三七四種である。（九〇・一一・三〇現在。）